東京国立文化財研究所要覧

1987・1988

昭和62・63年度

はじめに

昭和62年度は，前年度に引続いて各部において３件の特別研究を実施したほか，絵画等の美術品の画像処理などの新しい研究(科学研究費による)に着手した。恒例の国際シンポジウムは第11回を迎え，諸外国より５人の発表者を迎え「日本・東洋美術における転換期の諸問題」をテーマに活発な討議を展開した。

また，昭和63年度は，前年度からの継続的研究のほかに，新たに「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」(美術部，４年計画)と「仏教芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」(芸能部，４年計画)が発足した。また，プラズム法による出土金属遺物の処理法の研究など(科学研究費による)にも着手した。

昭和63年度には国際交流事業が急激に増加し，外国人発表者８人を招いて第12回国際シンポジウム「写真・映像などの画像を利用した美術品調査法の現状と将来」を開催したほか，昭和61年度より継続実施してきた特別研究「敦煌文化財保存修復に関する調査研究」に訪中団を派遣し，敦煌研究院との間に共同研究を開始するとともに，同院より５人の訪日団並びに２人の研究員を技術研修のために招くことができた。日米間ではスミソニアン研究機構との間に東アジア古文化財についての共同研究を行うための予備交渉がワシントンで行われ，次年度からの実施が約束されるにいたった。さらにカリフォルニア大学バークレー校との間では両者共催で「日本美術の研究の現状」というシンポジウムが現地開催された。このほか研究所が世話役となり IIC（国際保存科学者会議）の日本大会が「東洋文化財の保存」というテーマで盛大に開備されたことも忘れがたい。

なお両年度を通じて芸能部長，修復技術部長をはじめ永年研究所の発展に尽力された方々を送ることになったが，皆さんの御努力に対して心から

の敬意と謝意を表するものである。

終りに，昭和63年度より着手された研究所新営のための準備作業等のため，２年度合併号となったことをお許し頂きたい。

平成元年12月

東京国立文化財研究所長

濱田　隆

目　次

Ⅰ. 沿　　革 …… 1
1. 設立の経緯 …… 1
2. 年代別重要事項 …… 1
3. 歴代所長 …… 5

Ⅱ. 機構・職員・予算 …… 6
1. 機　　構 …… 6
2. 職　　員 …… 7
3. 名誉研究員 …… 12
4. 予　　算 …… 13
5. 科学研究費補助金交付一覧 …… 15

Ⅲ. 調査研究 …… 18
1. 美　術　部 …… 18
(1) 概　　要 …… 18
(2) 各　　論 …… 19
A. 一般研究 …… 19
B. 特別研究 …… 22
C. 科学研究費 …… 23
2. 芸　能　部 …… 24
(1) 概　　要 …… 24
(2) 各　　論 …… 26
A. 一般研究 …… 26
B. 特別研究 …… 28
C. 科学研究費 …… 28
3. 保存科学部 …… 29
(1) 概　　要 …… 29

(2) 各　　論 …… 30
A. 一般研究 …… 30
B. 特別研究 …… 37
C. 受託研究 …… 39
D. 科学研究費 …… 41
4. 修復技術部 …… 43
(1) 概　　要 …… 43
(2) 各　　論 …… 44
A. 一般研究 …… 44
B. 特別研究 …… 52
C. 受託研究 …… 52
D. 科学研究費 …… 54
5. 情報資料部 …… 55
(1) 概　　要 …… 55
(2) 各　　論 …… 56
A. 一般研究 …… 56
B. 科学研究費 …… 58
6. 敦煌文化財保存修復に関する調査研究 …… 59
7. 主要研究業績 …… 61

Ⅳ. 事　　業 …… 84
1. 出　　版 …… 84
(1) 美術研究 …… 84
(2) 日本美術年鑑 …… 85
(3) 芸能の科学 …… 85
(4) 保存科学 …… 86
(5) 国際研究集会プロシーディングス …… 87
2. 黒田清輝巡回展 …… 89
3. 公開学術講座 …… 90

4. 夏期学術講座 …… 91
5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 …… 93
6. 会　　議 …… 97
7. 国際・国内交流 ……102
(1) 職員の国際交流 ……102
(2) 海外研究者の来訪 ……106
(3) 招へい研究員 ……107

V. 研究施設・設備 ……110
1. 蔵　　書 ……110
2. 資　　料 ……111
3. 黒田記念室 ……112
4. 閲　覧　室 ……112

VI. 関係法規 ……113

I. 沿　革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は，昭和27年4月1日発足したが，その前身であり母体となったものは，昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は，大正13年7月，帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は，故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し，また，わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

(1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。

(2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。

(3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。

(4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和 元年12月　前記の事業を遂行するため委員会が設備され，東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し，美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄，黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清，建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎，会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和 2 年 2 月　美術研究所準備事業を開始した。

同　年10月　東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造，半地階2階建，延面積1,192m²の建物1棟を起工した（本館）。

同　3 年 9 月　前記の建物が竣工したので，美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し，また，館内に黒田子爵記念室を設け，同子爵の作

品を陳列した。

同　4年5月　遺言執行人代表者樺山愛輔は，建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日　勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ，東京美術学校正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同　年10月17日　美術研究所開所式を挙行した。

同　7年1月　美術研究所の研究成果発表機関誌として，定期刊行物『美術研究』を創刊した。

同　年4月18日　株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円，合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同　年5月26日　帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け，美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同9年10月18日　毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日　鉄筋コンクリート造，2階建，延面積129m²の書庫が竣工した。

同　年4月　『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。

同　年6月1日　勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し，閲覧事務を開始した。

同12年6月24日　勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され，従来，帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同　年11月29日　美術研究所長職務規程，美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日　木造，平屋建，延面積97m²の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日　黒田清輝の作品，並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日　美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同　年7～8月　酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため，さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年３月29日　酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同　年４月４日　酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同　年４月16日　東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年５月１日　美術研究所官制が廃止され，国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。（保存科学部の前身）。昭和23年度より専任の職員を配置し研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66m²）に設けた。

同　24年４月　科学研究費補助金により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年８月29日　文化財保護法の制定にともない，美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同　年８月29日　文化財保護委員会事務局設置にともない，保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

同26年１月31日　美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

同27年４月１日　文化財保護法の一部が改正，東京文化財研究所組織規程が定められ，美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の３部１室が置かれ，美術研究所組織規程が廃止された。

また，文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同　年７月１日　芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室２室を同大学から借用し，研究を開始した。

同28年４月26日　保存科学部研究室として，東京国立博物館構内の倉庫132m²を改造のうえ移転した。

同29年７月１日　東京文化財研究所組織規程の一部が改正され，東京国立文化財研究所となった。

同32年３月22日　東京国立博物館構内に木造，外部鉄網モルタル塗，平家建，８m²の保存科学部の薬品庫が竣工した。

沿　　革

同　年11月30日　従来の２階建書庫のうえにさらに１階を増築３階建とし，増築分延面積71m²が竣工した。

同34年４月30日　国立文化財研究所研究受託規程が定められ，この年度から受託研究が開始された。

同36年９月16日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され，従来の庶務室は庶務課となった。

同37年３月31日　東京国立博物館構内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として，鉄筋コンクリート造２階建延面積663m²の建物１棟が竣工した。

同　年７月１日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され，新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同　年７月20　日芸能部研究室は，保存科学部庁舎の竣工にともない，旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年６月15日　文部省設置法の一部が改正され，本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年８月23日　保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41m²)の起工式が行われた。

同45年３月25日　前記の別館が竣工したので，同年５月26日竣工式が行われた。

同　年３月25日　芸能部は，別館３階に移転した。

同　年５月８日　保存科学部は別館の地階～２階に実験用機械類の移転据付を完了した。

同　年６月29日　保存科学部庁舎の１階の模様替工事に着手し，同年10月15日工事が完了した。

同　年11月２日　所長および庶務課は，本館から保存科学部庁舎の１階に移転した。(本館は，美術部庁舎となる)したがって研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

同46年４月１日　保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m²を東京国立博物館から所管換された。

同48年４月12日　文部省設置法施行規則の一部が改正され，新たに修復技術部が設けられ４部１課となり，修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が

置かれ，保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年4月18日　文部省設置法施行規則の一部が改正され，情報資料部の新設により5部1課となり，情報資料部に文献資料研究室および写真資料研究室が置かれ，美術部資料室は廃止された。

同53年3月20日　本館構内の写場等(木造平家建延面積144m²)を取りこわし，情報資料部研究棟として，鉄筋コンクリート造，地下1階，地上3階，延面積565.95m²の建物が竣工した。

同53年4月5日　文部省設置法施行規則の一部が改正され，新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

同59年6月28日　文部省組織令が改正され，本研究所は文化庁施設等機関となった。

3. 歴代所長（昭和5年～平成元年）

主事	正木直彦	（昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24）
主事	矢代幸雄	（昭和 6.11.25～昭和10. 5.31）
所長事務取扱	和田英作	（昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21）
所長	矢代幸雄	（昭和11. 6.22～昭和17. 6.28）
所長事務取扱	田中豊蔵	（昭和17. 6.29～昭和22. 8.15）
所長	田中豊蔵	（昭和22. 8.16～昭和23. 5.10）
所長代理	福山敏男	（昭和23. 5.11～昭和24. 8.30）
所長	松本栄一	（昭和24. 8.31～昭和27. 3.31）
所長事務代理	矢代幸雄	（昭和27. 4. 1～昭和28.10.31）
所長	田中一松	（昭和28.11. 1～昭和40. 3.31）
所長	関野克	（昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1）
所長	伊藤延男	（昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31）
所長	濱田隆	（昭和62. 4. 1～現　　在）

Ⅱ. 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機　　構

- 所　長
  - 庶務課
    - 課　長
      - 課長補佐
        - 庶務係
        - 会計係
  - 美術部
    - 部　長
      - 第一研究室
      - 第二研究室
      - 主任研究官
  - 芸能部
    - 部　長
      - 演劇研究室
      - 音楽舞踊研究室
      - 民俗芸能研究室
      - 主任研究官
  - 保存科学部
    - 部　長
      - 化学研究室
      - 物理研究室
      - 生物研究室
      - 主任研究官
  - 修復技術部
    - 部　長
      - 第一修復技術研究室
      - 第二修復技術研究室
      - 第三修復技術研究室
      - 主任研究官
  - 情報資料部
    - 部　長
      - 文献資料研究室
      - 写真資料研究室

2. 職　　員

（昭和63年３月30日現在）

所　　属	職　　名	氏　　名	
所　　長	所　　長	濱田　隆	（美術史）
庶務課	課　　長	笹山保美	
	課長補佐	西山　博	
庶務係	係　　長	斎藤　朗	
	庶務主任	松本多賀子	
	事務補佐員	中村節子	
	〃	太田有喜子	
	〃	滝澤真由美	
	〃	東　紀子	
	技能補佐員	簿井祥子	
	調査員(非)	松原美智子	
会計係	係　　長	相澤　昇	
	係　　員	山下　登	
	事務補佐員	鎌田祥子	
	〃	山西恵美	
	技能補佐員	遠田由太郎	
	労務補佐員	竹之内たみ	
美術部	部　　長	関口正之	（日本仏教絵画史）
第一研究室	室　　長	三宅久雄	（日本彫刻史）
	主任研究官	田實榮子	（染織工芸史）
	研究員	井上一稔	（日本彫刻史）
	調査研究員(非)	上野アキ	（東洋古代絵画史）
第二研究室	室　　長	三輪英夫	（日本近世・近代絵画史）
	研究員	佐藤道信	（日本近代絵画史）
	〃	山梨絵美子	（日本近代絵画史）
芸能部	部　　長	三隅治雄	（民俗芸能）
演劇研究室	室　　長	佐藤道子	（寺院芸能）
	調査研究員(非)	松本　雍	（中世芸能）
	〃	広瀬美都	（日本東洋音楽史）
音楽舞踊研究室	室　　長	蒲生郷昭	（音楽学）

所属	職名	氏名	
	調査研究員(非)	高桑いづみ	(日本東洋音楽史)
民俗芸能研究室	室長	羽田昶	(日本演劇)
	主任研究官	中村茂子	(民俗芸能)
	調査研究員(非)	仲井幸二郎	(芸能史)
保存科学部	部長	馬淵久夫	(同位体化学)
化学研究室	室長	平尾良光	(分析化学)
	主任研究官	門倉武夫	(無機分析化学)
物理研究室	室長	見城敏子	(塗料化学)
	主任研究官	石川陸郎	(光学)
	〃	三浦定俊	(計測工学)
	研究補佐員(非)	富澤威	(分析化学)
生物研究室	室長	新井英夫	(微生物学)
	調査研究員(非)	山野勝次	(応用昆虫学)
修復技術部	部長	樋口清治	(高分子化学)
第一修復技術研究室	室長	中里壽克	(日本工芸史)
	主任研究官	西浦忠輝	(木材材質改良学)
	専門職員	茂木曙	(彩色保存技術)
第二修復技術研究室	室長	増田勝彦	(日本工芸史)
第三修復技術研究室	室長事務取扱	樋口清治	(高分子化学)
	主任研究官	青木繁夫	(考古学)
情報資料部	部長事務取扱	濱田隆	
文献資料研究室	室長	米倉迪夫	(日本中世絵画史)
	研究員	島尾新	(日本中世絵画史)
写真資料研究室	室長	鶴田武良	(中国絵画史)
	研究員	鈴木廣之	(日本近世絵画史)
	研究員	井手誠之輔	(東洋絵画史)
	専門職員	橋本弘次	(美術写真)
	〃	市川和正	(〃)
	〃	野久保昌良	(〃)

（平成元年３月30日現在）

所属	職名	氏名	
所長	所長	濱田　隆	（美術史）
庶務課	課長	池田義春	
	課長補佐	西山　博	
庶務係	係長	江原　勉	
	庶務主任	松本多賀子	
	事務補佐員	中村節子	
	〃	滝澤真由美	
	〃	白井久美子	
	技能補佐員	浅井美由起	
	調査員(非)	松原美智子	
会計係	係長	長谷川憲康	
	係員	山下　登	
	事務補佐員	鎌田祥子	
	〃	志村浩美	
	技能補佐員	遠田由太郎	
	労務補佐員	菊地廣吉	
美術部	部長	関口正之	（日本仏教絵画史）
第一研究室	室長	三宅久雄	（日本彫刻史）
	主任研究官	田實榮子	（染織工芸史）
	研究員	井上一稔	（日本彫刻史）
第二研究室	室長	三輪英夫	（日本近世・近代絵画史）
	研究員	佐藤道信	（日本近代絵画史）
	〃	山梨絵美子	（日本近代絵画史）
芸能部	部長	佐藤道子	（寺院芸能）
演劇研究室	室長	羽田　昶	（日本演劇）
	主任研究官	鎌倉惠子	（近世演劇）
	調査研究員(非)	広瀬美都	（日本東洋音楽史）
音楽舞踊研究室	室長	蒲生郷昭	（音楽学）
	調査研究員(非)	高桑いづみ	（日本東洋音楽史）
民俗芸能研究室	室長	中村茂子	（民俗芸能）
	調査研究員(非)	三村昌義	
保存科学部	部長	馬淵久夫	（同位体化学）
化学研究室	室長	平尾良光	（分析化学）

所属	職名	氏名	
	主任研究官	門倉武夫	(無機分析化学)
物理研究室	室長	見城敏子	(塗料化学)
	主任研究官	石川陸郎	(光学)
	〃	三浦定俊	(計測工学)
	研究補佐員(非)	富澤威	(分析化学)
生物研究室	室長	新井英夫	(微生物学)
	調査研究員(非)	山野勝次	(応用昆虫学)
修復技術部	部長	伊原恵司	(建築史)
第一修復技術研究室	室長	中里壽克	(日本工芸史)
	主任研究官	西浦忠輝	(木材材質改良学)
	専門職員	茂木曙	(彩色保存技術)
第二修復技術研究室	室長	増田勝彦	(日本工芸史)
	研究員	川野邊渉	(高分子工学)
第三修復技術研究室	室長	青木繁夫	(考古学)
情報資料部	部長	鶴田武良	(中国絵画史)
文献資料研究室	室長	米倉迪夫	(日本中世絵画史)
	研究員	島尾新	(日本中世絵画史)
写真資料研究室	室長事務取扱	鶴田武良	
	主任研究官	鈴木廣之	(日本近世絵画史)
	研究員	井手誠之輔	(東洋絵画史)
	専門職員	橋本弘次	(美術写真)
	〃	市川和正	(〃)
	〃	野久保昌良	(〃)

昭和62年度における退職者

所属	官職名	氏名	在職期間	備考
庶務課	事務補佐員	小野美佐子	60. 4. 1～62. 6.30	退職
	労務補佐員	竹之内たみ	61. 9.10～62.12.10	〃
	技能補佐員	簿井祥子	57. 7. 1～63. 3.30	〃
芸能部	部長	三隅治雄	27.10. 1～63. 3.31	〃
	事務補佐員	太田有喜子	53. 5. 1～62. 4.30	〃
	調査員(非)	仲井幸二郎	41. 5. 1～63. 3.31	〃
修復技術部	部長	樋口清治	37.10. 1～63. 3.31	〃

昭和63年度における退職者

所属	官職名	氏名	在職期間	備考
庶務課	課長補佐	西山博	52. 4. 1～ 1. 3.31	退職
	会計係長	相澤昇	57. 4. 1～63.12.25	〃
	庶務主任	松本多賀子	39. 6.16～ 1. 3.31	〃
	事務補佐員	山西恵美	60. 6. 1～63. 4.28	〃
	〃	小島和子	63. 5.16～63.10.28	〃
	〃	東紀子	62. 7.13～63.10.31	〃
	技能補佐員	湯本美雪	63. 4. 7～63.10.31	〃
	事務補佐員	滝澤真由美	58. 4. 1～ 1. 3.30	〃
	〃	鎌田祥子	56. 5. 1～ 1. 3.30	〃
美術部	主任研究官	田實榮子	23. 3.31～ 1. 3.31	〃
保存科学部	物理研究室長	見城敏子	29. 9. 1～ 1. 3.31	〃
修復技術部	専門職員	茂木曙	29. 7. 1～ 1. 3.31	〃

3. 名誉研究員

氏　　名	退職時官職名	在職期間	名誉研究員発令年月日
白畑よし		5. 6.30～27. 8. 1	53.10.18
福山敏男	美術部長	23. 5.11～34. 4.15	〃
高田　修	〃	27.12. 1～44. 3.31	〃
岩崎友吉	修復技術部長	27. 4. 1～49. 5.31	〃
登石健三	保存科学部長	27.10. 1～50. 4. 1	〃
岡　畏三郎	美術部長	20. 5.15～51. 4. 1	〃
中村傳三郎	美術部第二研究室長	22.10. 1～53. 4. 1	〃
関野　克	所長	40. 4. 1～53. 4. 1	〃
秋山光和	美術部第一研究室長	21.10. 1～42. 2. 1	54.10.18
久野　健	情報資料部長	20. 5.31～57. 4. 1	57.10.18
川上　巽	美術部長	21. 2.28～57. 4. 1	〃
関　千代	美術部第二研究室長	18.12.15～58. 4. 1	58.10.18
横道萬里雄	芸能部長	28. 3.16～51. 4. 1	59.10.18
上野アキ	情報資料部文献資料研究室長	17.11. 3～59. 4. 1	〃
江上　綏	情報資料部主任研究官	38. 5.81～59. 3.31	〃
田村悦子	美術部主任研究官	22. 6.16～60. 3.31	60.10.18
猪川和子	情報資料部文献資料研究室長	22. 6.27～60. 3.31	〃
伊藤延男	所長	53. 4. 1～62. 3.31	62.10.18
柳沢　孝	美術部長	27. 4. 1～62. 3.31	〃
江本義理	保存科学部長	27. 4. 1～62. 3.31	〃
宮　次男	情報資料部長	30. 9. 1～62. 3.31	〃
三隅治雄	芸能部長	27.10. 1～63. 3.31	63.10.18
樋口清治	修復技術部長	37.11. 1～63. 3.31	〃

4. 予　　算

昭和62年度　　( )は補正後を表す。

事　　項	千円
人　件　費	283,245
運　営　費	(349,105) 122,425
事業管理	(32,431) 34,211
一般研究	(36,322) 37,632
特別研究	(272,322) 42,419
壁画・障壁画の科学的研究	1,924
伝統芸能の保存組織のあり方の研究	2,621
金属文化財の材質・技法および保存に関する科学的研究	3,158
敦煌文化財保存修復に関する調査研究	14,587
研究用機器整備	20,129
受託研究	(1,592) 1,592
文化財保護に関する国際交流	(6,438) 6,571
文化財保存修復に関する研究のための国際研究集会	3,372
招へい研究員	2,857
ローマセンター資料収集提供	342
文　部　省	
各所修繕	689
在外研究員旅費	5,153

昭和63年度

（　）は補正後を表す。

事　　項	千円
人　件　費	292,218
運　営　費	(121,594) 126,200
事業管理	(31,790) 33,521
一般研究	(36,407) 37,745
特別研究	(45,367) 46,771
金属文化財の材質・技法および保存に関する科学的研究	3,158
敦煌文化財保存修復に関する調査研究	16,090
日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成	1,834
仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究	2,485
研究用機器整備	23,204
受託研究	(1,592) 1,592
文化財保護に関する国際交流	(6,438) 6,571
文化財保存修復に関する研究のための国際研究集会	3,372
招へい研究員	2,857
ローマセンター資料収集提供	342
文部省	
各所修繕	2,044
在外研究員旅費	11,820

5. 科学研究費補助金交付一覧

昭和62年度

（1） 職員が研究代表者となったもの

種　別	課　題　名	研究代表者	交付額
			千円
総合研究(A)	考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究	門倉武夫	2,300
〃	非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究	伊藤延男	8,000
〃	飛鳥～平安時代仏像彫刻の漆芸技法に関する調査研究	中里寿克	4,000
一般研究(C)	仏教典礼に基づく法華経信仰の研究	佐藤道子	1,300
試験研究(1)	本邦出土古代ガラスの原料産地と材質の変遷	馬淵久夫	1,000
〃	美術史学研究支援画像処理モデルの開発	米倉迪夫	19,000
〃	埋蔵文化財の出土品の科学的保存に関する研究	見城敏子	4,000
〃	古建築の保存を目的とした石材の凍結劣化防止法の基準化	西浦忠輝	6,000
海外学術研究	中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究	馬淵久夫	1,800

（2） 職員が研究分担者となったもの

種　別	課　題　名	研究代表者名	研究分担者
総合研究(A)	四十八体仏の彫刻史的保存科学的調査とその基礎研究	東京国立博物館 奥村秀雄	馬淵久夫 平尾良光 石川陸郎 三浦定俊 三宅久雄
〃	醍醐寺の密教法令と建築空間に関する総合的研究	東京大学 稲垣栄三	佐藤道子
〃	工房の美学	九州大学 平田寛	井手誠之輔

昭和63年度

（1） 職員が研究代表者となったもの

種　別	課　題　名	研究代表者	交付額
			千円
総合研究(A)	非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究	濱田　隆	2,000
〃	飛鳥～平安時代仏像彫刻の漆芸技法に関する調査研究	中里寿克	2,000
一般研究(A)	日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究	関口正之	12,700
一般研究(B)	環境制御等による微生物被害防除法の開発	新井英夫	2,600
一般研究(C)	仏教典礼に基づく法華経信仰の研究	佐藤道子	500
試験研究(1)	本邦出土古代ガラスの原料産地と材質の変遷	馬淵久夫	1,000
〃	美術史学研究支援画像処理モデルの開発	米倉迪夫	8,600
〃	埋蔵文化財の出土品の科学的保存に関する研究	見城敏子	1,900
〃	古建築の保存を目的とした石材の凍結劣化防止法の規準化	西浦忠輝	1,800
〃	プラズマ法による出土金属遺物の保存修復研究	青木繁夫	22,800
海外学術研究	在外日本美術作品の調査研究と内外の研究交流の促進	関口正之	3,000
〃	東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究	濱田　隆	3,200
〃	中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究	増田勝彦	1,800

（2） 職員が研究分担者となったもの

種　別	課　題　名	研究代表者名	研究分担者
総合研究(A)	非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究	東京国立文化財研究所 伊藤延男	馬淵久夫
〃	四十八体仏の彫刻史的・保存科学的調査とその基礎的研究	東京国立博物館 奥村秀雄	馬淵久夫 平尾良光
〃	日中美術の特色の比較研究―8世紀以降の絵画と彫刻を中心に―	実践女子大学 松原三郎	三宅久雄
〃	醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合研究	東京大学 稲垣栄三	佐藤道子

Ⅲ. 調査研究

1. 美術部

(1) 概　　要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い，かつその成果を公表することを目的としている。美術部は二室より構成され，第一研究室は古美術を担当し，第二研究室は近代・現代美術を担当している。

研究調査は各時代にわたり絵画・彫刻・工芸の各部門について，作品と文献資料との両面から実証的に進められており，共に基礎となる研究資料の作成と整理とに努めているほか，現代美術の動向に関する調査と資料収集をも平行して行っている。また，作品に関し，早くから実施してきた科学的な鑑識法を積極的に活用しているのも当部の特色である。さらに情報資料部所員とは研究や調査の面で緊密な協力が行われている。昭和59年度から4か年計画で始まった情報資料部と共同の特別研究「壁画・障壁画の実証的研究」は62年度をもって調査と関係資料の収集を終えた。第二研究室では，昭和63年度より特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」を4か年計画で開始し，新たに資料収集と研究調査を始めた。そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお，研究員それぞれの研究課題と内容は(2)研究調査活動の項に示すとおりである。

研究調査の結果は，第一研究室全員が編集担当する機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し，また，第二研究室を中心とする『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行しており，単行の研究報告も随時刊行している。さらにそのほか情報資料部との共同で，研究成果の一部を広く一般の理解に資するために毎年一回公開学術講座を開催している。なお，黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所，現美術部は黒田清輝の作品その他関係資料を保管し，その多くを陳列する黒田記念室は毎週一回木曜日の午後公開している。

第一研究室

日本及び東洋諸地域の古美術について，各研究員が専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め，主要問題を捉えた共同研究を行い，常に精密な基礎資料の収集に努めている。なお，第一研究室の研究員は『美術研究』の編集業務を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と，これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究，並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを継続して行っている。また昭和63年度より4か年計画で特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の資料集成」を開始し，研究調査に着手した。とくに現代美術に関する調査研究においては，その年度に収集した資料を整理し，その成果を『日本美術年鑑』として毎年公刊している。62年度は，昭和60年の内容をもった昭和61年版を，63年度は，昭和61年，62年の内容をもった昭和62・63年版(合本)を刊行，引続き平成元年版の編集に着手した。

また，研究事業として昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており，62年度は北九州市立美術館，63年度は福島県立美術館で開催した。

(2) 各　　論

A. 一般研究

1. 美術基準作品の研究

わが国古代中世の美術工芸品のうち，国宝・重要文化財あるいはそれに準ずる優作で，年記銘を有する作品あるいは作者・流派・様式等を代表するもの等，美術史上の基準的作品について詳細に考察し，併せて文献史料の検討をも加え，美術工芸遺品の体系づけに役立てる。

(1) 仏教絵画の調査研究

いずれも中世初期の不動明王画像(出光美術館)，十王図(出光美術館)，大日如来像(京都・個人蔵)の調査を行った。(関口)

(2) 日本仏教彫刻史研究

調査研究

昭和62年度

平安～鎌倉前期の阿弥陀如来彫像を中心に調査を行った。主要なものは以下の通り。

大阪・常見寺及び安楽寺阿弥陀如来像，京都・即成院諸仏および長講堂阿弥陀三尊，和歌山・光台院阿弥陀三尊像。(三宅)

神奈川・証菩提院阿弥陀三尊像，栃木・真教寺阿弥陀如来像，和歌山・五坊寂静院阿弥陀三尊像，京都・醍醐寺大威徳明王像，岩手・中尊寺金色堂諸像(三宅，井上)

昭和63年度

京都・宥清寺日蓮上人像，兵庫・浄土寺阿弥陀如来像(三宅)，福島・勝常寺諸像および能満寺虚空蔵菩薩像，栃木・地蔵院諸像，京都・長講堂阿弥陀三尊及び甘露寺十一面観音像，新潟・日光寺阿弥陀如来像(三宅・井上)，静岡・MOA美術館，奈良・当麻寺，京都・安楽寿院阿弥陀如来像(井上)。

(3) 染色品の研究

ア　上代裂の研究

東京国立博物館所蔵の法隆寺裂・正倉院裂の基礎調査を続行している。(田実)

イ　近世初期染織品及び小袖の研究

米沢市の上杉神社所蔵上杉謙信所用服飾類の調査・研究，宮城県白石市の片倉家伝来服飾類の調査・研究，仙台市博物館新収品の伊達藩士濱田伊豆，同菅野家伝来の服飾類の調査・研究，伊達家伝来・豊臣秀吉よりの拝領品「天翼」の調査・研究，和歌山市の紀州東照宮伝来服飾類の調査・研究，日光山輪王寺伝来の胴着三領の調査研究を行った。(田実)

ウ　沖縄の伝統染織技術の現状と遺品資料の調査・研究

沖縄本島・宮古群島・八重山群島の島々に残る古来からの染織技術の実態調査(4回)に基づき，調査結果の整理・検討を行った。

エ　アイヌ染織品の調査・研究

室町時代以降のわが国染織品に関連が多く，また原始的要素が濃厚に残存するアイヌ染織品について，昭和60年度以降引続き調査・研究を続行している。

(田実)

オ　東京芸術大学美術学部中野政樹代表者の科学研究費(昭和58・59・60年度)の「日本工芸基礎資料集成とその技術に関する研究」の分担者としての研究(染織品の基礎資料調査)結果に基づき，その整理・検討と分析を行った。

カ　東京国立博物館資料部の「古画類聚に関する研究」の調査・研究に，服飾・染織・風俗関連事項の分担者として調査・研究に当る。

2.　科学的方法による材質と技法の研究

X線透過法，赤外線写真，紫外線螢光法，双眼実体顕微鏡，赤外線テレビ等を用いた科学的方法により，わが国美術工芸品の材質・技法・構造などを明らかにする。

(1)　古代中世絵画の材質技法に関する研究

仏教説話図の研究として，広島県所在の仏伝図の調査，および中世初期の不動明王画像(出光美術館蔵)・大日如来像(京都・個人像)の調査を行った。(関口)

(2)　仏像彫刻の材質技法に関する研究

62年，63年，東京国立博物館が実施している法隆寺献納宝物特別総合調査のうち7線透視撮影等の方法を用いた四十八体仏の材質，鋳造技法の調査研究に参加した。(三宅・井上)

また，修復技術部中里寿克を中心として行われた飛鳥～平安時代仏像彫刻の漆芸技法に関する調査研究に参加した。(三宅)

さらに，栃木・真教寺阿弥陀如来像，地蔵院諸像，奈良・法隆寺百済観音像ほかのX線透視撮影を行い，木彫像の構造・技法の研究を進めた。(三宅・井上)

(3)　伝統的染織技術の調査・研究

日本工芸会で昭和53年度から続行している東京国立博物館蔵「白地風景模様茶屋染帷子」の復元は，実物に出来得る限り近い上布を作るための苧麻糸作りと，染模様模作のための綿密な実物写真撮影から取り掛った。きれ地の上布ができるまでの間，各技術者は各自の分担技術のその模様を習熟する。こうして昭和59年度に入って下絵が完成，昭和60年度で糸目糊置に入ったが，この難関の技術は昭和63年度の終りに近い頃，やっと成功を見た。

その後の工程は，各技術畑の日本工芸会スタッフで順調に進み，完成，昭和64年秋の第36回日本伝統工芸展に特別出陳される。この調査・復元模造に参加した当研究所スタッフは，写真撮影者の野久保昌良と学識的見地からの協力者神谷榮子(〈本名〉田

實榮子)。

3. 美術様式とその伝播の研究

わが国美術工芸に見られる様式の展開と系統を，インド・中国・朝鮮や西洋諸地域など諸外国にその源流を探り，その影響と受容の様相を明らかに位置づけるとともに，国内における史的展開を体系化する。一方，日本以外の外国各地の美術に関してもそれぞれ様式的検討を行う。

現存する中国絵画の包括的再検討と国内国外における補足的調査

東京大学東洋文化研究所戸田禎佑教授を代表とする共同研究に参加し，写真資料による検討を加えた。(関口)

4. 作家・流派および美術団体の研究

日本近代作家およびこれに関連する美術家等の伝記資料と作品，作家の属する流派や美術団体の活動などを網羅的かつ体系的に調査して，その実体を明らかにする。

(1) 日本近代美術基礎資料の研究

久米桂一郎のフランス滞在中の関係資料の調査研究(三輪)，鹿子木孟郎の滞欧中の書簡の調査研究(山梨)，在米の近代日本作品調査(佐藤)，在米近代日本美術家関連文献の調査(山梨)など，海外における近代日本美術作家活動に関する基礎的資料調査を行った。

(2) 日本近代作家研究

近代日本美術の作家事典作成のため，洋画家，日本画家，版画家，挿絵画家，彫刻家など，1200数十名の画歴および作品の研究を行った。(三輪・佐藤・山梨)

(3) 美術団体に関する研究

明治以降現代にいたる美術団体の歴史と動向について調査を行った。(三輪・佐藤・山梨)

B. 特 別 研 究

1. 「壁画・障壁画の実証的研究」(昭和62年度…4か年計画の第4年次)

本研究はわが国古代・中世・近世にわたる社寺建造物等の内部を飾る壁画・障壁画を研究対象とする。これらの中には画面の剝落や褪色等の劣化の著しいものが少なくなく，よって科学的な鑑識法による詳細な調査を実施し，それぞれの材質や技法及び

様式的特色を明らかにするとともに，文献的考察をも加え，それらの美術史的位置づけを行おうとするものである。本年度は先年来実施してきた赤外線テレビカメラによる鶴林寺太子堂四天柱絵の補足調査，西明寺三重塔壁画，三溪園臨春閣障壁画の調査を行った。

2.「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」（昭和63年度…4か年計画の初年次）

本研究は，明治20年代以降の日本近代美術の発達に関する基礎資料，特に内外の博覧会及び美術展覧会を対象に，文献資料の収集と作品の調査研究を行うものである。

初年度は，第3～5回内国勧業博覧会，パリ万国博覧会(1889，1900年)，シカゴ・コロンブス世界博覧会等の出品目録及び関係資料の所在確認と調査，並びに文献資料の収集と整理を行い，併せて，上記博覧会等の出品作品のいくつかについて調査を行った。

C. 科学研究費

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」（一般研究(A) 研究代表者 関口正之）（昭和63年度…3か年計画の初年次）

絵画・彫刻・工芸各分野の様々な側面での密接な関係が，その史的展開に大きく反映されていることは，日本における美術のあり方を端的に示す重要な特色のひとつといえる。こうした特色は，従来指摘されながらも，具体的な問題に即した総合的な解明は試みられていない。本研究は，モチーフの問題を各分野間の接点に据え，絵画・彫刻・工芸各分野における共通のモチーフを取り上げて相互に比較検討を加え，その史的展開を明らかにすることを目的とする。特に，古代・中世研究班は，絵画・彫刻と染織・蒔絵・金工の工芸分野の作品にみられるモチーフ・文様の比較研究を行い，近世・近代研究班は，作家を中心に据え，各分野における主題およびモチーフの伝承関係を検討する。また，同研究班共同で広範な基礎資料の収集にあたる。

昭和63年度の研究結果は次の通り。

古代中世研究班・第一班

1) 日本彫刻の着衣形式……対馬所在の古代彫刻の調査

2) 十一面観音—経典と表現との関係……福岡・長谷寺蔵十一面観音像の調査

調査研究

3) 仏伝図・忿怒形尊像—図像学的展開……新出不動明王像の調査

古代中世研究班・第二班

1) 浄土宗系高僧伝絵—テキストと絵画……岡山県立博物館蔵伝法絵断簡，茨城県常福寺蔵拾遺古徳伝絵の調査

2) 頂相における図像の伝播と変容……群馬県泉龍寺蔵白崖宝生像他，14・5世紀頂相の調査

3) 漆工・金工・扇面画のモチーフ伝播……根津美術館蔵扇面画巻の調査

近世・近代研究班

1) 宗達派古典モチーフの典拠と表現……宗達派源氏絵と中・近世源氏物語注釈書との比較研究

2) 近代日本画における画題と技法……水墨と水彩技法の比較研究(研究成果を『美術研究』345号に発表)

3) 近代絵画史における歴史画と構想画……黒田清輝の構想画とその系譜に関する研究

2. 芸能部

(1) 概要

芸能部は，日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし，演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては，諸芸能の理念・構造・技法及びその継承保存に関する研究などがあり，その研究に必要な資料の収集・整備，及び記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また，研究の成果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

62年度は，部をあげて行っている特別研究「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」の最終年次として，諸芸能における伝承者組織とそれを支える保存組織のありようについての補足的調査と研究を行った。

63年度は，前年度で終了した前記特別研究の成果を「芸能の科学17」において公表した。また新たな特別研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」では，衰

滅の危機にある延年の芸態を把握し，芸能史的位置づけを明らかにするために，全員による残存事例の実態調査と討議を行うこととし，初年度にあたる本年度は資料収集及び岩手県毛越寺と岐阜県長滝寺の延年調査を行った。

科学研究費補助金による研究としては62・63年度を通じて「仏教典礼に基づく法華経信仰の研究(一般研究(C)　研究代表者　佐藤道子)」を行い，「醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究（総合研究(A)　研究代表者　東京大学教授　稲垣栄三)」には，佐藤道子が研究分担者として参加，それぞれに成果の発表を行った。

演劇研究室

日本古典演劇について芸能学的な調査研究を行い，また，これら諸芸能の周辺にあって，伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

62年度は，個人研究・共同研究ともに昨年度に引き続いて寺院行事の研究に重点を置き，特に過去20年にわたって調査・記録を行った録音資料に基づいて，諸宗派の論義法要諸形式の比較分析を行い，これと並行して，前記資料の永久保存のためのＰＣＭダビングの作業を行った。

63年度は，個人研究として「悔過会の史的研究」「能楽技法に関する総合的研究」「近世演劇における夢の研究」「敵役の研究」を行い，共同研究として「論義会法要形式の研究」「能の囃子事の研究」を行った。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について，芸能学的・音楽学的な調査研究を行い，これら伝統芸能の成立に深い関係をもつ周辺分野についても，調査研究を進めている。

62年度は，個人研究として，「楽器の音楽図像学的研究」「邦楽用語の研究」「能の大鼓と小鼓の手組の研究」を行ったほか，共同研究「能の囃子事の研究」に参加した。

63年度は，「日本の声楽旋律の分析」「能の大鼓と小鼓の折り合いの研究」を行い，前年に引き続き共同研究「能の囃子事の研究」に参加した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし，それらの保存・継承に資するため

調 査 研 究

に必要な研究を行っている。

62年度は，個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」を行い，共同研究として，「能の囃子事の研究」を行った。

63年度は個人研究として引き続き「民俗芸能における採り物の研究」，また「上方落語の研究」を行い，共同研究として「民謡歌詞の様式研究」を行った。

(2) 各　　論

A. 一 般 研 究

1. 悔過会の史的研究

過去20年にわたる残存事例の実地調査と文献史料調査の成果に基づき，悔過会の伝播についての考察を行った。(62・63年度，佐藤)

2. 能楽技法に関する総合的研究

能・狂言の演技演出の各領域について，客観的分析と歴史的(主として近代・現代における)変遷の考察を行うことを目的とするが，本年度は番外曲復曲・新作の活動，新演出，野外能，婦人能等の活動について，調査を行った。(63年度・羽田)

3. 近世演劇における夢の研究

歌舞伎・浄瑠璃に設定されている夢の場面を検討し，当時の人々の夢に対する認識と夢の場の演出について考察した。(63年度・鎌倉)

4. 敵役の研究

歌舞伎における敵役について，浄瑠璃との交流を視点に入れながら，京・江戸・大坂の相違や時代的推移について考察した。(63年度・鎌倉)

5. 論義会法要形式の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し，各宗派にわたる総合的比較研究を行い，その変遷・分化をあとづけることを一貫した目的とする。

61年度に引き続き，過去20年間の録音収集資料をもとにして，華厳・法相・天台・真言諸宗派の論義法要の構成形式を比較分析し，論義法要の諸形式の展開を追究することを試みた。また，この研究課題に関わる各宗派の法会の実地調査として，延暦寺の法華大会・長講会と勝林院・若松寺の修正会の調査・録音・撮影を行い，以上に加えて東海地方における各宗派寺院の法会勤修に関わる基礎調査を行った。(62・63年

度，佐藤・廣瀬）

6. 能の囃子事の研究

能の現行曲に用いられる出入事(登退場の小段)と繋事(独立性の希薄な小段)，動事(舞踊的演技を行う囃子事小段)について，各役各流派の譜本及び奏演の実際に基づくデータを10年ほど前から収集してきたが，それを62年度に終了し，63年度はそれらの概要，形態，用法等を分析・整理し，客観的・体系的に記述して公表すべく，原稿化した。(62・63年度，蒲生・羽田)

7. 楽器の音楽図像学的研究

日本の美術作品には，多くの音楽場面が描かれており，それらは音楽史研究上，重要な資料となりうるものである。本年度は三味線の図像の研究をひとまず終了し，語り物琵琶の図像の考察を行った。(62年度・蒲生)

8. 邦楽用語の研究

10年余にわたって収集した邦楽用語につき，それぞれの出自を整理し，問題点を検討した。(63年度・蒲生)

9. 能の大鼓と小鼓の手組の研究

大鼓と小鼓の手組の比較分析を行い，幸流小鼓に特有な手組「ヌク地」「切地」について，大鼓との関係，手組の派生過程等を考察した。(62年度・高桑)

10. 日本の声楽旋律の分析

日本の伝統的声楽から新内節を取りあげ，その旋律の音高変化，音量変化をメログラフを用いて分析するための準備をした。(63年度・蒲生)

11. 能の大鼓と小鼓の折り合いの研究

大鼓と小鼓の手組の比較分析を行い，流儀による折り合いの良否，またその意義について考察した。(63年度・高桑)

12. 民俗芸能における採り物の研究

62年度は田楽系芸能における採り物，特に翁芸の採り物に関する調査研究を行い，63年度は榊・杉・松などの植物を採り物として扱っている民俗芸能について調査研究を進めた。(62・63年度，中村)

13. 上方落語の研究

現行演目の原話について，昔話・巷談・奇談等との交流について研究を進めた。

調査研究

(63年度・三村)

14. 民謡歌詞の様式研究

全国的な民謡歌詞調査結果に基づき，東北地方の歌詞カードの作成を進めた。

(63年度，中村・三村)

B. 特別研究

1. 「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」(4か年計画の第4年次)

人から人への技法の伝達によって保存が可能になる伝統芸能にあっては，その伝達を正確かつ強固に行わしめる保存伝承組織の確立が望まれる。そのため，過去の伝承組織の諸相を考察し，また，現に各地にある保存会・養成会・愛好会等の実態を調査し，それらの分析を通して，伝統芸能の文化財としてのより完璧な保存組織のあり方を研究する。最終年度である62年度は，諸芸能の伝承組織に関して補足的な実態調査を行い，また成果刊行のための検討を行った。

以上の経緯を経て，63年度にはその成果をまとめ，「芸能の科学17」に三篇の論文として発表した。

2. 「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」(4か年計画の初年次)

わが国の伝統的な行事や芸能の多くは，仏教との深い関わりの中で成立展開してきた。その様相を具体的に解明し，文化史・芸能史の流れの中に明確な位置づけを行うことを目的とする。とりわけ，社会変動や生活基盤の変化に対応し得ず衰滅しつつある芸能に，学術的な調査研究の目を注ぐ意味は大きいと考え，本研究では延年の調査研究に主眼を置く。

伝統的諸芸能の母胎ともいうべき延年を追究するために，全員による調査研究を実施するが，63年度は，全国に伝存する延年事例の資料を収集し，実地調査の事例を選択し，岐阜県白鳥町長滝寺「長滝の延年」と岩手県平泉町毛越寺「延年」の実態調査を行った。

C. 科学研究費

1. 「仏教典礼に基づく法華経信仰の研究」(一般研究(C) 研究代表者 佐藤道子 研究分担者 廣瀬美都)

わが国において，仏教受容期以来広く深く浸透した法華経信仰の，定着・展開の様相を，典礼の形態を通して把握することを目的とし，特に中世以前の展開過程に焦点を定めた。62・63両年度を通して延暦寺の法華大会・長講会，葛川明王院の蓮華会，三千院の御懺法講，勝林院・毛越寺・中尊寺の修正会などの実態を調査記録し，また各種文献・史料から南北朝以前の宮中・寺社年中行事や天台諸師の事績を抽出するなどの作業を行った。これらの過程において，法華八講会の存在は看過し難く，その消長を探ることを最大の課題として成果の一部をとりまとめた。

2. 「醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究」（総合研究(A) 研究代表者 東京大学教授 稲垣栄三）

醍醐寺における密教建築と密教法会との関係を復原的に考察することを目的とし，醍醐寺の密教法会の歴史的実態，それを支えた寺内構造，法会の構成等を追究する。その研究分担者として，61年度に引き続き62・63年度も醍醐寺所蔵史料の現地調査並びに写真撮影を行い，データベース化のための調書を作成した。また，63年度（最終年度）には以上の成果をとりまとめ，データベース化した資料「醍醐寺文書聖教編年目録」と共に報告書として提出した。（佐藤）

3. 保存科学部

(1) 概　　要

文化財の材質・構造・劣化に関する科学的研究ならびに文化財を取巻く環境の研究を行っている。研究成果は文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

研究組織は化学研究室，物理研究室，生物研究室の３室からなっている。調査研究結果は，修復技術部と共同の機関誌「保存科学」により公表される。なお63年度には客員研究員１名分が配属され，東京大学理学部野津憲治助教授が併任として研究に加わった。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質及び保存に関する問題点を化学的手法を用いて調査・

研究している。X線分析法，光学的方法，質量分析法などを用い，主として金属文化財に関する劣化，保存対策，材料産地などの問題について研究を進めている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質及び保存に関する問題点を物理的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質，構造を調査する方法としてγ線・X線・紫外線・赤外線などを用いている。また展示，収蔵，梱包などの文化財を保存する環境の定量的評価，および劣化防止対策について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化，すなわち微生物や昆虫による被害の実態調査，そしてこれら加害生物による劣化の機構を明らかにし，加害生物防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各　　論

A. 一般研究

1. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

昭和62年度

(1) 重文荒神谷遺跡出土銅剣の調査

鉛同位体比測定は337本を終了し，島根県に保管されている21本について錆試料を採取した。鉛の産地は昨年度の報告と大筋で変らず，大部分が華北産で，朝鮮半島産が若干あり，日本産は皆無である。(馬淵・平尾)

(2) 荒井神谷遺跡出土銅鐸・銅矛の調査

銅鐸6，銅矛16点の鉛同位体比を測定した。銅鐸は1点が華北産原料，5点が朝鮮半島原料，銅矛は10点が華北産原料，4点が朝鮮半島産原料，2点が両者の中間値となった。(馬淵・平尾)

(3) 朝鮮半島出土金製品の調査

蛍光X線分析法を用いて非破壊で朝鮮半島出土の金製品中の金と銀の比を求めた。試料により，比にかなりの変動が見られた。この比(金の純度の違い)が製品とどのような関係にあるのか研究中である。(平尾)

(4) 法隆寺四十八体仏の材質

蛍光X線分析法で，今までに約30体を測定し，銅―鉛―スズ，銅―鉛，銅―スズ合金および純銅という材質の違いが明らかに認められた。(平尾)

(5) 非破壊赤外分光光度計の改良

文化財の材質を非破壊的に測定できるように赤外分光光度計を改良し，それによって，油，漆，膠，染料等の測定を可能にした。(見城)

(6) エミシオグラフィーの利用

文化庁の依頼により華厳五十五所絵(旧原三溪コレクション)の調査を行い，白色顔料として鉛白ではなく白土を用いていると推定し，X線回折による確認を行った。またブリヂストン美術館所蔵の伝レンブラント作「ペテロの否認」の総合調査をブリジストン美術館および国立歴史民俗博物館の研究員の協力により行った(継続中)。このほか，根津美術館所蔵の屏風の調査を行った。(三浦)

(7) 材質調査に対する非破壊式X線回折法，非破壊式蛍光X線分析法の応用

出土遺物の腐食生成物，絵画顔料の同定および建造物等の大型試料を対象とした移動測定法について検討した。試料面が粗雑なため精度はあまり期待できないが，大型試料に対しても測定が可能となった。(門倉)

(8) 漆固化のメカニズム

漆の固化がウルシオールの減少量および不溶化率と関係があることを見出した。(見城)

(9) 古代漆芸技法

電子顕微鏡により古代の漆芸品の下地固めに珪藻土を含んだ地の粉が多く使用されていることが分かった。(見城)

昭和63年度

(1) 重文荒神谷遺跡出土銅剣の調査

鉛同位体比測定は全資料358本について完了した。(馬淵・平尾)

(2) ストロンチウム同位体比法による土器・石器の分類と産地推定

調査研究

準備段階として，岩石試料からストロンチウムを抽出する化学的基礎実験を行った。

（平尾）

(3) イオンクロマトグラフィーによる文化財の材質研究

イオンクロマトグラフィー分析装置により文化財の劣化に関与する陰イオンの測定を行った。基礎資料を収集する目的で腐食生成物，顔料，脱塩処理液等の塩化物イオン，硝酸イオン，燐酸イオン，硫酸イオンの分析を試みた。

現在，試料の前処理について検討を行っている。

新たに購入した顔料について水中に溶出する上記各イオンの分析を行った。結果，同名の顔料(赤系)でも塩化物イオンの含有量に差があることが認められた。（門倉）

(4) 古代漆芸品の下地技法の研究

走査電子顕微鏡断面像，X線マイクロアナライザーによって，奈良時代(5点)，鎌倉時代(2点)，江戸時代(4点)の漆芸品の材質を分析し，下地技法について研究した。

（見城）

(5) 画像処理によるX線透視写真の鮮明化

アナログ処理を用いた画像処理装置を開発し，X線画像の鮮明化に成功した(浜松ホトニクスと共同)。この装置を光得寺所蔵大日如来のX線画像に適用し，胎内納入物について詳しい情報を得た。成果は10月の国際シンポジウムで発表した。(三浦)

(6) エミシオグラフィーの利用

平等院鳳凰堂の壁扉画の調査を行った。壁画が重ね塗りされている状況などが明らかになった。結果の一部は，10月の国際シンポジウムで秋山光和氏によって発表された。

（三浦）

2. 材質の劣化に関する研究

昭和62年度

(1) 進行性の青銅錆を分析し，$CuCl_2 \cdot Cu(OH)_2$，$Cu(OH)Cl \cdot Cu(OH)_2$ という組成の鉱物が推定された。このことによりブロンズ病という進行性の錆には確実に塩素が主成分として含まれており，水の存在により錆が進行すると考えられる。(平尾)

(2) 油絵表面の結晶性生成物

結晶性生成物について非破壊式X線回折法，イオンクロマトグラフィー法を用い生成物の同定法を検討し，硫酸亜鉛アンモニウムの塩が生成されていることを確認した。

これは，下地に亜鉛華顔料を用いた絵画に多く，アンモニア，硫酸の由来について検討中である。(門倉)

(3) 照明による漆芸品，油絵の劣化

漆製品や油絵は，低湿度より高湿度の環境下で照明した方が表面の劣化が激しく，内部にまで及ぶことが分かった。(見城)

(4) 石造文化財の凍結破壊

福島県小高町の薬師堂磨崖仏の保存事業(国庫補助事業)に関連して，気象調査を行った。覆屋の改良工事により，内部での凍結破壊は防げるようになったが，密閉性がよくなったために湿気が内部にこもり，カビの発生がみられた。今年度裏山からの水の侵入を防ぐ工事を行っており，この点は改善されると思われ，その経過を観察中である。(三浦)

昭和63年度

(1) 青銅錆の研究

青銅製品に発生する鮮やかな緑色の錆について，資料数を増やして測定した。鮮やかな錆は $CuCl(OH)\cdot Cu(OH)_2$ が主成分であることが放射化分析法，X線回折法で確かめられた。(修復技術部と共同)(平尾)

(2) 石造文化財の凍結破壊に関する研究

福島県小高町薬師堂磨崖仏の保存事業(国庫補助事業)に関連して，気象調査を行った。62年度に裏山からの水の侵入を防ぐ工事を行った結果，石仏は乾燥する傾向にあるが，堂内の湿気は依然として高く，天井板など部分的に結露するところがあるので，さらに経過を観察中である。(三浦)

(3) 染料，顔料の変退色の研究

温度，湿度および酸素，炭酸ガス，窒素の各単独ガスの染料，顔料の変退色への影響および変退色のメカニズムを単色光を用いて研究した。(石川・三浦)

(4) 漆の耐光堅牢度を増加する研究

漆は光に弱いのが欠点である。ケヤキの抽出液は光に当ることによって，構造は漆に似ているが日光に強い膜ができることを知り，漆の中にケヤキの抽出液を混合し，漆塗膜の光劣化の防止の可能性について研究した。(見城)

(5) フォクシング形成機構の生化学的研究

調査研究

フォクシング部位には，セロオリゴ糖とグルコースおよびγ-アミノ酪酸その他15種類のアミノ酸が存在していた。従って，フォクシングはアミノ酸と糖の間に生じるアミノ-カルボニル反応によって形成される可能性がある。

フォクシングの主因はカビであることが判明し，現在フォクシング形成のメカニズムを研究している。フォクシング褐色物質の合成とその分離を試み，代表的成分の分取方法を検討中である。(新井)

(6) 酸性紙中和法の研究

ジエチル亜鉛による書籍類の中和条件等について，検討した。(新井)

(7) 燻蒸法の研究

文書館等において，燻蒸処理後に臭気の発生する要因を究明し，これがジアゾ感光紙の一種に含まれる成分に起因することが判明した。(新井)

3. 環境に関する調査研究

昭和62年度

(1) 中尊寺金色堂の環境調査

金色堂保存施設の改良工事(国庫補助事業)に伴う調査を行っている(継続中)。内外の温湿度測定記録の解析結果から，床下の断熱工事の成果が上がっていること，展示ケースのガラス表面への結露防止のために，覆屋内部の空調が不可欠であることなどを明らかにした。また，堂内照明実験を行い，照明設備の改善を行うように勧告した。

(石川・三浦)

(2) 博物館・美術館等の環境調査

下記の博物館・美術館等の展示室・収蔵庫の温湿度・照明・汚染等の環境測定，新施設のシーズニングの検討を行い，保存・展示環境の適否に関し調査を行った。

(見城・石川)

茨城県	茨城県立歴史館	静岡県	富士市立博物館
愛知県	名古屋市立美術館	愛知県	一宮市博物館
愛知県	徳川美術館	滋賀県	長浜城歴史博物館
滋賀県	野洲町立歴史民俗資料館	山口県	毛利博物館
大阪府	八尾市歴史民俗資料館	岡山県	岡山県立美術館
香川県	香川県埋蔵文化センター		

(3) 博物館・美術館環境中の二酸化窒素濃度について

昨年度から継続していた各地の博物館などの二酸化窒素の汚染調査結果を総括の結果，空調完備の展示室でも出入口に近い所では外気の影響を受けていることが分かった。また，展示ケースの使用は効果的であった。(門倉)

(4) 調湿紙の改良

展示ケース内のパネル，調湿箱，額の裏のパッキング等に使用するために，厚手の調湿紙を改良した。(見城)

昭和63年度

(1) 中尊寺金色堂の環境調査

金色堂保存施設の改良工事(国庫補助事業)に伴う調査を行っている(継続中)。現在，金色堂のあるガラスケース内部は65%前後の湿度が保たれている。(三浦)

(2) 文化財の保存環境の評価に関する研究

文化財環境中の空気汚染度の評価を検討する目的で，博物館，美術館等の内外合計17測定点で昭和63年7月から拡散エアサンプラーによる二酸化硫黄，二酸化窒素を，ガーゼ補修法による海塩粒子の測定を行うとともに鉄板，銅板，銀板の曝露試験を行っている。

現在までの結果から海塩粒子は東文研屋上で高い濃度が検出されていること，展示室等の屋内では低い濃度であることが認められている。(門倉)

(3) 埋蔵環境の保存科学的研究

藤ノ木古墳石棺の開棺内の空気を採取して微生物等の計測を行った。

高松塚古墳石室の保存状態を調査した。(新井)

(4) 博物館・美術館等の環境調査

下記の博物館・美術館等の展示室・収蔵庫の温湿度，照明，汚染等の環境測定，新施設のシーズニングの検討を行い，保存・展示環境の適否に関し調査した。(見城・石川・三浦)

神奈川県	横浜美術館
茨 城 県	土浦市博物館
千 葉 県	千葉県立中央博物館
千 葉 県	千葉県立美術館

調査研究

福岡県　福岡市博物館

三重県　皇学館大学

4.　紙質文化財の保存に関する研究

昭和62年度

(1)　フォクシングの要因

絵画・書籍等に発生するフォクシングの微生物的研究により，カビがフォクシングの主要因であることを究明した。また，フォクシングの要因となるカビの水分に対する挙動から，絵画等の保存環境の調整によるフォクシング防止対策を報告した。

（新井）

(2)　フォクシングの再現実験

絵画等の修復への寄与を目的として，カビに起因するフォクシング形成機構を生化学的に研究している。これまでに，リンゴ酸，ブドウ糖とセロオリゴ糖，7種類のアミノ酸の存在を確認した。さらに，これらの成分によるフォクシングの再現も可能となった。（新井）

(3)　酸性紙の中和処理法の検討

ジエチル亜鉛による酸性紙中和の実験では，各種雑誌類を供試した場合の処理条件を求め，さらに中和処理装置についても検討を加えた。（新井）

5.　生物学的調査

昭和62年度

(1)　ネフェルタリ王妃墓

エジプトのネフェルタリ王妃墓の天井顔料変色部位および床で採取した小片から，7菌株のカビを分離した。この種のカビは，我が国の古墳で分離されたことはなく，微生物学的にも興味ある種類が含まれているので，微生物分類学的研究を行った。

（新井）

(2)　臼杵磨崖仏

大分県臼杵磨崖仏の山王石仏に発生した褐色物質等を調査した。石仏が褐色を呈する主因は，スミレモで，その他緑藻のスチココッカスなどの藻類の防除対策も検討した。（新井）

(3)　祐天寺宝物館

祐天寺宝物館の生物被害を調査し，イガ，シバンムシ，ゴキブリの食痕および虫糞の存在が認められた。（新井）

(4) その他

千葉県東の庄町の天正検地帳，鴨川市竜江寺の木造地蔵菩薩坐像，八日市橋の中台板石塔婆，旧平野家住宅の保存状態，加害生物を調査し，保存対策を検討した。（新井）

昭和63年度

(1) 新宮殿千鳥の間に発生している褐色斑点は，カビに起因するフォクシングと同定した。（新井）

(2) 上智大学図書館で発生したカビは，条件的好稠性糸状菌であった。（新井）

(3) 国立国会図書館で書籍に発生したカビは，全て絶対好稠性糸状菌であった。（新井）

(4) 東京芸大小泉文夫記念資料室の東アフリカ民俗楽器の虫害は，カツオブシムシ，イガ，シバンムシ，ゴキブリによるものであった。（新井）

6. 生物被害の対策と防除

(1) 下記３機関に指導を行った。（新井）

国立国会図書館　酸性紙中和と書籍の保存法

奈良国立博物館　燻蒸施設の改善

福岡市立美術館　燻蒸施設の新設

(2) 生物被害防除の実施（新井）

ア　東京国立近代美術館蔵の軸装にカビが発生したので，燻蒸処理した。

イ　国立国語研究所図書館の書籍の一部に虫害が認められたので，これを燻蒸処理した。

ウ　文化庁が，昭和62年度に新指定する木造彫刻２軀に加害虫が生息していたので，これを燻蒸処理した。

B. 特別研究

昭和62年度

1. 「金属文化財の材質・技法および保存に関する科学的研究」（４か年計画の第３年次，修復技術部と共同研究）

調査研究

金属文化財の保存・修復技術の向上に資するため，基礎的な分析法の検討を行った。

(1) プラズマ発光分光分析

鉄器試料の微量元素分析のため，チタン・マンガン・アルミニウム等に対する鉄の干渉および定量限界に関する基礎的なデータの蓄積を行った。

(2) 蛍光X線分析法

鉛―スズ合金の組成比を検量線法で定量し，これがＩＣＰプラズマ発光分光分析法とよく一致することが確かめられた。

(3) 中性子放射化分析法

鉄器および鉄錆中に含まれる塩素の迅速分析法を確立し，1 μgCl/g 試料が実用的な定量限界であることを確かめた。この方法を応用し，鉄器の脱塩素処理における塩素の挙動を修復技術部と協力して明らかにした。

(4) 鉛同位体比測定

熊本県出土の青銅鏡・銅鏃・巴形銅器，岡山県出土の小銅鐸，神奈川県厚木市出土の青銅鏡などを測定した。

(5) X線透視撮影

東京国立博物館所蔵の近畿地方出土の金属遺品約 200 点の調査を行った。この成果は「東京国立博物館図版目録古墳遺物篇(近畿)」として刊行される予定である。

(6) ガンマ線透視撮影

東京国立博物館で開催された金銅仏展に出品された仏像２体の調査を行った。

昭和63年度

1.「金属文化財の材質・技法および保存に関する科学的研究」（４か年計画の第４年次，修復技術部と共同研究）

金属文化財の保存・修復技術の向上に資するため，基礎的な分析法の検討を行った。

(1) プラズマ発光分光分析

青銅資料として，新安沖沈船の貨幣を取上げ，約60個の古銭の時代による材質の違いを明らかにした。

(2) 蛍光X線分析法

機器を新設したため，標準試料による検量線を作成，時間変化，機器条件の設定など，機器の調整と試験的な測定を行った。

蛍光X線分析法を用い，非破壊で鍍金層の金銀比を求めた。資料により，純金，2—10%銀，10%以上の銀含有量を示す場合があり，金の材質の違いがかなりあることが分かった。

東京国立博物館所蔵の国宝・龍首水瓶を蛍光X線法で測定し，材質がブロンズであることを確かめた。ブロンズの上に鍍金している。さらにペガサスなどの模様を鍍金して描いていることが明らかになった。

(3) 質量分析法

機器を新設したため，機器の調整と試験的な測定を行った。試験的に，福岡県平原遺跡出土の青銅鏡の鉛同位体比を従来の機器と並行して測定し，それらが一致することを確かめた。

また，静岡県浜松市郊外出土の銅鐸8点，群馬県出土の中世～近世における弾丸16点，福岡県九州歴史資料館及び太宰府市教育委員会所蔵品など，約20点の測定を行った。

(4) X線透視撮影

東京国立博物館所蔵の国宝龍首水瓶の調査を行った。水瓶の厚みが3～4mmでほぼ一定であること，青銅に鬆が多く比重がかなり軽いことなどが分かった。この成果はミュージアム4月号に掲載される予定である。

C. 受託研究

昭和62年度

1. 太宰府出土金属製品の保存修復研究

この研究の目的は，太宰府市宝満山遺跡から発見された高さ約8cmの銅造観音菩薩像の保存修復処置とその構造，材質の調査および原料産地の推定にある。この像は，火を受けたらしく通常の出土銅製品と違った劣化状態を示し，泥が固く付着していた。

〈保存修復〉 超音波メスによる泥のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理およびインクララックの減圧含浸による強化を行った。

〈分析調査〉 蛍光X線法で材質を調査した結果，純銅であることが判明した。鉛同位体比を分析したところ，原料は日本産の銅を使用したことが分かった。(修復技術

調査研究

部，保存科学部）

2.　夜須町峯遺跡出土金属遺物の保存修復研究

この研究の目的は，福岡県夜須町峯遺跡から発見された内行花文鏡，銅剣，鉄剣，鉄戈の保存修復処置とその構造，材質の調査および銅製品の原料産地の推定にある。

〈保存修復〉

銅製品　超音波メスによる錆のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる噴の安定化処理およびインクララックの減圧含浸による強化処置を行った。

鉄製品　エアーブラシュによる泥や錆のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，シランカップリング剤の前処理をした後アクリル樹脂の減圧含浸による強化処置を行った。

〈分析調査〉

銅製品　蛍光X線による分析の結果，２面の内行花文鏡とも鉛を含んだ青銅で作られ，また，小型内行花文鏡に付着している赤色顔料は，水銀朱であることが判明した。鉛同位体比分析で，中国産の鉛を原料に使用したことが分かった。

ガラス製品　ＩＣＰ分析によりバリウムを多く含む鉛ガラスであることが分かった。付着している赤色顔料は，蛍光X線分析で朱であることが判明した。また，鉛同位体比を測定したところ，中国産の鉛を顔料に使用したことが分かった。（修復技術部，保存科学部）

3.　トルコ，カマン・カレホユック遺跡出土金属製品の調査研究

鉄及び青銅製品の化学組成を原子吸光，ＩＣＰ，放射化分析法で定量した。鉄錆についてはX線回折法で鉱物種を同定し，内部が主として磁鉄鋼 Fe_3O_4，外部は赤鉄鋼 FeO(OH) で構成され，塩化ナトリウム等の岩塩系沈澱物が少量みられた。これら沈澱物の出現は極度の乾燥状態を反映している。

昭和63年度

1.　細江町穴の谷遺跡出土銅鐸の保存修復研究

この研究の目的は，静岡県引佐郡細江町穴の谷遺跡から発見された銅鐸の保存修復処置研究と材質，原料産地の調査である。

〈保存修復〉　超音波メスによる泥や錆のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩

処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理及びインクララックの減圧含浸による強化処理をした。

〈分析調査〉 蛍光X線法で材質調査を行った結果，この銅鐸は鉛を少量含んだ青銅であることが判明した。アンチモン，銀，ヒ素が痕跡程度測定されている。鉛同位体比による原料産地の推定については現在検討中である。

2. 深谷遺跡出土の保存・修復研究

この研究の目的は，静岡県掛川市深谷遺跡から発見された和同開珎と鏡2面の保存修復処置と材質，原料産地の調査である。

〈保存修復〉 顕微鏡下での針やメスを使用してのクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理及びインクララックの減圧含浸による強化処理を行った。和銅開珎や鏡に付着していた繊維によって和銅開珎の使用法がわかるのでこの形状を壊さないように注意して処置を行った。

〈分析調査〉 付着していた繊維の同定は，布目順郎氏に依頼した。その結果麻(大麻？)と判定された。

銅貨自体の材質，原料産地等については現在分析中である。

3. 可成寺金銅筒脛の保存・修復研究

この研究の目的は，岐阜県兼山町に所在する可成寺に伝世した鎌倉時代の脛当保存修復処置と鍍金飾金具の分析である。

〈保存修復〉 鉄部分はエアーブラッシュでクリーニングした。鍍金飾金具の緑青は顕微鏡下でメス，針等を利用して機械的に除去した。ソクスレー法で脱塩処理，シランカップリング剤で鉄錆の安定化処理し，最後にアクリル樹脂エマルションの減圧含浸処理で強化した。

〈分析調査〉 鍍金飾金具の材質を蛍光X線分析した。その結果材質は純銅で，従来鍍金と言われていたものが鍍銀と判明した。

D. 科学研究費

昭和62年度

1. 「非破壊的方法による彩色文化財の 総合的現地調査方法の 確立とその応用に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 濱田 隆)

調査研究

既存の蛍光X線分析装置およびX線回折装置にリフターを付けて可動式に改良し，横浜の三溪園内に存在する重要文化財天端寺寺堂覆堂内の彩色顔料を非破壊的に定性分析した。

2.「考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究」（総合研究(A)　研究代表者　門倉武夫）

海底の埋蔵環境を北海道江差の開陽丸遺物について研究した。また，鉄器さび層の銅の存在，青銅製品の埋蔵環境内での成分元素の移動についても分析化学的研究を行った。

3.「本邦出土古代ガラスの原料産地と材質の変遷」（試験研究(1)　研究代表者　馬淵久夫）

弥生時代，古墳時代，奈良平安時代のガラス試料を約250点収集し，蛍光X線法と放射化分析法で分析した。

4.「埋蔵文化財の出土品の科学的保存に関する研究」（試験研究(1)　研究代表者　見城敏子）

古墳時代の遺跡および古墳から出土した赤色顔料の一種，ベンガラ試料3点を走査電子顕微鏡で観察すると，いずれの試料も中空円筒状の特異な形態を示すことが判明した。これらの試料は，高湿度の埋蔵環境から出土した試料であることを勘案して，市販のベンガラの実験室的再現の条件を見出した。

5.「中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究」（海外学術研究　研究代表者　馬淵久夫）

敦煌莫高窟の環境調査のため，昭和63年3月に増田，三浦，西浦，江本（研究協力者）が現地に行き，温度・湿度・日照量の測定器を設置した。

昭和63年度

1.「非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究」（総合研究(A)　研究代表者　濱田　隆）

既存の蛍光X線分析装置およびX線回折装置にリフターを付けて可動式に改良し，横浜の三溪園内に存在する重要文化財天端寺寺堂覆堂内の彩色顔料を非破壊的に定性分析した。

2.「環境制御等による微生物被害防除法の開発」（一般研究(B)　研究代表者　新井

英夫)

社寺の障壁画に発生するカビ被害防除法として，カビの発芽はどの程度の微風で阻害できるかの基礎的研究を目的とする。本年度は，南禅寺方丈において，防護用ガラス戸を設置した場合と取除いた場合について，温度の水平分布と境界層分布，湿度の水平分布，風速の水平分布を実測した。

3. 「本邦出土古代ガラスの原料産地と材質の変遷」(試験研究(1)　研究代表者　馬淵久夫)

弥生時代，古墳時代，奈良平安時代のガラス試料約20点について鉛同位体比を測定した。

4. 「埋蔵文化財の出土品の科学的保存に関する研究」(試験研究(1)　研究代表者　見城敏子)

樹脂処理のため水中保存している出土木材は，その間に腐朽による劣化の可能性がある。その対策のため，木材処理薬剤の比較検討，柔腐朽菌の分離を試みた。

5. 「東アジア地域の古文化財(青銅器および土器・陶磁器)の保存科学的研究」(海外学術研究　研究代表者　濱田　隆)

平成元年1月19～28日，馬淵，平尾，三浦(以上東京国立文化財研究所)，田中(奈良国立文化財研究所)，高浜(東京国立博物館)，田口(国立歴史民俗博物館)の6名がワシントンに赴き，スミソニアン研究機構のヴァン・ゼルスト，オリン，ヴァンディヴァー，セイアー，ジョエル(以上保存分析研究所)，チェイス，ジェット，コート(以上フリアー美術館)氏らと会談討議し，つぎの5項目について今後共同研究を行なうことを申し合せた。①鉛同位体比のデータベース②青銅器の腐食機構③鍍金④青銅器の鋳型の文献収集⑤縄文土器

4.　修復技術部

(1)　概　　要

修復技術部は，文化財の修復に関する科学的調査研究とその公表を主務とする部で，老化破損した文化財を修復する方法を科学的に調査研究している。

研究対象としては，絵画，彫刻，工芸品，書跡，考古資料，建造物および民俗資料

等極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては，3研究室，6研究員，1専門職員からなっている。

第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第二修復技術研究室

紙，繊維又は皮革を主材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第三修復技術研究室

金属，石，土又はその他の無機材質の文化財の修復に関する科学的，技術的研究とその結果の公表を主務とする。

各研究室とも経常的な研究として，有形文化財を構成している材料，構造，製作技法についての研究や，それらを修復するための伝統技術の整理体系化と科学的裏付の資料集積，そして科学的な材料，技法の修復への応用と開発のための実証的な研究などを実施しており，特に材質強化，補強，接合，剝落防止，朽損部充塡などについて各種合成樹脂の応用と修復技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては，保存科学との共同研究が必要な部分もあり，また，部内においても一つの文化財が二つ以上の研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く，それらについては各研究室員による共同作業によって研究が進められている。

(2) 各　　論

A. 一 般 研 究

1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

(1) 漆芸品の研究

昭和62年度

ア　春日大社古神宝類(国宝)のうち，漆芸品約20点について調査した。

昭和63年度

ア　中世漆芸品のうち，紀年銘を有するもの，文献や目録等によって製作年代が

明確なものについて調査した。

重文　蓬莱蒔絵鏡箱(熱田神宮―文安２年)

国宝　橘蒔絵手箱(熊野速玉神社―明徳元年)

千鳥蒔絵手箱(東博)

重文　住吉蒔絵唐櫃(東博―正平12年)

重文　桧扇蒔絵手箱(東博)

重文　蒔絵経箱(輪王寺―延応３年)(中里)

イ　金沢市米泉遺跡出土の縄文時代晩期の漆芸品約70点の製作技法を調査した。陶胎漆器，籃胎漆器があり，籃胎漆器の内では櫛の製作技法，漆塗技法に見るべきものがあった。

ウ　国宝・百済観音立像(法隆寺所蔵)の漆木屎を，顕微鏡等により調査した。漆木屎は上半身に施工され，当初と思われるものの他に明治時代の漆木屎の所在も確認された。(中里)

エ　中尊寺金色堂内陣巻柱，及び高欄の調査

金色堂内陣四天柱の内，乾柱と坤柱の２本および須彌壇上の高欄６組は，さきに実施された保存修理(昭和37年10月～43年７月，覆堂・金色堂解体修理，新覆堂建設)に際して腐朽が甚だしく，再使用は不可能と判断され，別途保存されてきた。保管に際して巻柱については当研究所において応急的修復措置を行った後，巻柱は金色堂新覆堂内に，高欄材は収蔵庫に保管された。

中尊寺は，昭和62年６月から(平成２年３月完了予定)新覆堂内の保存施設の改修を実施中で，この機会に上記部材のその後の破損状況を調査すると共に保存修理の方法，適切な公開展示方法の策定を図ることとし，昭和63年９月より調査に着手した。

調査は財団法人文化財建造物保存技術協会が受託し，当研究所の修復技術部，保存科学部が全面的に協力指導する形で実施中である。

調査の内容は漆芸技法及び破損状況調査，Ｘ線透視撮影，金属部分及び蒔絵粉の分析，漆及び漆地粉類の分析，生物学的調査，構造力学的調査が主なものである。

破損調査では巻柱のいわゆる赤錆の施工範囲と漆芸部分の破損状態及び高欄の木部の状態を色別に分類図化した。またＸ線透視，立体撮影は巻柱の構造及び腐朽範囲の究明に有効であった。漆地粉の分析を行い新知見を得た。(伊原・中里)

調査研究

(2) 紙製品の研究

ア 紙の劣化に関する研究

昭和62年度

和紙に対する明礬の影響を，明礬濃度の違いと，pH 値，各種強度の変化によって測定した。明礬を塗布した和紙を80℃80％ＲＨで強制劣化させて，劣化前後および塗布明礬濃度間で物性を比較した。90年前に制作された木版画の例では，白色部分で裏打ち紙の強度が高く余白部分では裏打ち紙は茶色で強度が低いことなどから，白色顔料(Ｘ線回折法により胡粉と同定)によって裏打ち紙の劣化が抑制されていると推定した。この研究は，東京農工大学との科学研究費，保存科学部，高知県紙業試験場と共同して行った。(増田)

イ 古代の紙に関する研究

昭和63年度

スウェーデン国立民俗博物館の要請によって，ヘディン収集楼蘭文書の調査と修復処置を行った。料紙の調査は，厚さ，面積，重さ，簀の目数，糸目間隔，厚薄ムラの程度，繊維種類，繊維塊等を調査測定した。その結果，調査した料紙に関しては，精粗の差はあるものの全てが同じ種類の技術仕様で製造され，複数の製造技術は見られなかったことが明らかになり，当時の製紙技術の未分化状態を推測させる。すなわち，全てが大麻繊維で出来ていること。漉簀から湿紙を剝して壁などに刷毛で張り付け乾燥したことが判明した。また，測定値から換算した嵩比重は，現代の手漉和紙に似ていて，打紙加工はしていないと推測された。なお，調査・測定は高知県紙業試験場の援助を得て修復技術部内で行った。(増田)

2. 彩色建造物の保存修復研究

昭和63年度

ア 鹿島神宮本殿(茨城県・重文)ほか３件の彩色調査について

鹿島神宮は元和４年(1618)徳川幕府の造営になる社殿で内外に華麗な漆塗装と彩色装飾が施されている。建立後の度重なる修理で当初の彩色文様が損なわれていたが，今回の保存修理に際して保存科学部，情報資料部と共同で旧彩色文様をＸ線写真，赤外写真，斜光観測等の光学的調査によって調査した。この調査の結果に基づいて彩色文様が復元されることになった。(伊原)

イ　戸隠神社本殿(兵庫・重文)

大永４年(1524)建立の社殿で，外部は丹塗，組物には極彩色が施されている。鹿島神宮と同様に保存科学部・情報資料部と共に旧顔料の分析調査，赤外写真，斜光観測等による旧文様の検出を行った。この結果，旧の顔料は丹土が用いられていたこと，彩色文様も現状とは異なっていたことが判明し，今回の修理で再現することができた。(伊原)

ウ　園城寺毘沙門堂(滋賀・重文)

元和２年(1616)建立の一間堂で内外に華麗な彩色がある。塗装修理に際して当初の彩色顔料の調査を依頼されたものである。保存科学部と共同で旧顔料についてＸ線回折法による調査を実施した。この研究では旧顔料がそれぞれ確認できたほか，下地に使用された胡粉あるいは白土と推定される白色顔料が，空気中の硫酸ガスもしくは木地固めに用いられた礬水中の硫酸によって石膏化したと推定される現象が認められ，今後の研究に興味ある課題を提供した。(伊原)

エ　法華経寺祖師堂(千葉・重文)

昭和62年度

延宝６年(1678)建立の日蓮宗本堂で，江戸時代中期の華やかな塗装彩色で装飾されている。現在の彩色の下には当初の彩色が隠されていると予想されたため，今回の修理に際して原型を確認することになり，保存科学部・情報資料部と共同して組物，内陣柱，琵琶板についてＸ線透視，赤外写真撮影を実施した。なお，この調査は次年度以降も継続して行う予定である。(伊原)

今年度は剝落止め用接着剤の改良を目的とし，川越市喜多院の木彫彩色童子像の剝落止めを試験的に施行した。従来から経験的に知られている「ふのり」による剝落止めが処理後の光沢が最も少ないことに注目し，「ふのり」のような粘性を持つ合成高分子ＨＰＣ(ヒドロキシプロピルセルロース)の１～２％水溶液をベースとし，さらにより強い接着性を得るためにアクリルエマルションを２～３％添加したものを試作して剝落止めを行った。その結果，従来の合成樹脂より光沢の少ない剝落止め処置が可能になった。(増田)

3.　木造文化財の修復に関する研究

昭和63年度

調 査 研 究

ア　神崎神社本殿，拝殿彫刻の風化防止(鳥取県・県指定保護文化財)

嘉永６年(1853)鳥取藩御抱大工小倉園三郎によって建立された総ケヤキ造の社殿である。近世的な特徴として，壁画や組物には精緻な丸彫りの彫刻を飾る。日本海に面した丘陵上にあり，素木造りであるために冬期間を中心とした潮風の吹き付けにより彫刻類の風化が甚だしい。

幸い，この社殿は間口２ｍの小規模な建築であり，容易に保存処置が反復して実施できる利点もあることから，樹脂等による表面強化が妥当と判断し，パラロイドＢ72(希釈剤キシレン，濃度15%)を同様に劣化したケヤキの古材を用いて予備実験を行ったのち，現地で施工した。この修理は平成１年３月完了した。

近世の社寺建築はケヤキの彫刻装飾が多用されており，この種の劣化に対する有効な保存処置の開発要請は今後多くなることが予想される。

イ　清水寺本堂の部材補修について(島根県・重文)

明徳４年(1393)建立の大規模な七間堂である。使用材種はシイ，マツ，スギで，柱はシイが主であるが，シイの特徴として内部が空洞化して，仕口部分で割裂を生じている。また，スギは木理に沿った割裂が認められる。これらの部材は断面寸法が40～50cmに及ぶ大材で新たに補足することが困難で，資料的にも再使用を前提とした保存処置を施す必要がある。

施工は平成元年度を予定しており，今年度は仕様の基本的調査を実施した。(伊原)

4.　紙の文化財の保存処置に関する研究

昭和62年度

ア　文書補修のための漉嵌め法改良の研究

昨年度に試作した漉嵌め機を使用して，漉嵌めによる文書補修の実験を進め，和紙パルプの調整法，漉嵌め速度調整用合成粘剤の濃度，補修用和紙パルプ積算法，脱水法，漉嵌め機操作法等について，日本の文書に最適な値を決定した。なお，この研究は元興寺文化財研究所と共同で行った。(増田)

イ　古代の紙の修復処置に関する研究

スウェーデン国立民俗博物館の要請によって，ヘディン収集楼蘭文書の調査と修復処置を行った。修復処置は，文書の形にくり抜いた極薄い楮紙(天具帖紙)の繊維先端を文書の周囲に接着させて文書を保持し，楮紙を台紙に半固定する方法を取った。木

筒の内削片は，割損が進行していたので薄楮紙で裏打ちし，楮紙を台紙に固定する方法を取った。なお，修復処置は3つの工房の援助を得て修復技術部内で行った。

5. 金属文化財の保存修復研究

昭和62年度

現在，早急に解決しなければならない重要な研究課題は，出土鉄製品の錆の安定化処理にある。その一つとして真空中でプラズマ化した水素原子を鉄製品に衝突させ，その中の塩素と化学反応させて除く方法がある。この方法が有効かどうか基礎実験を行った。プラズマ処理をする前に放射化分析を行い塩素量を検討した。その結果をソクスレー方式で脱塩した資料と比較したところプラズマ処理によって塩素を除きやすくなることが分かった。

大英博物館では，鉄製品中の塩素を酸化エチレンガスと反応させて除去する方法を研究している。この処理は，気相中で行われるので有機物が付着している考古遺物や民俗品の脱塩処理には有効と考えられる。基礎研究を始めるにあたって大英博物館保存科学部化学研究室長スーザン・ブラッドレー女史を招へい研究員として呼び検討を始めた。(青木)

昭和63年度

プラズマ法については，昨年に引続き実験を行っているが，従来のソクスレー処理による脱塩では，全塩素量の50%程度しか脱塩できなかったが，プラズマ処理した遺物をさらにソクスレー処理をしたところ全塩素量の80%を脱塩することができた。

銅製品の進行性の腐食であるブロンズ病は，塩化銅や塩基性塩化銅が水と反応することがその原因であると言われている。この腐食メカニズムについては疑問視する人もいるが，このメカニズムについてX線回折分析等で確認したところ確かに存在することが判明した。これらの錆は，通常白緑色をしている。錆の結晶成長速度が非常に遅い環境で形成された場合には，錆びは白緑色ではなく我々がいわゆる緑青と呼びならわしている色になる場合も存在することが分かった。このことは従来ブロンズ病の有無を，錆色の状態から判断していた基準を再検討する必要がでてきたと言える。

(青木)

6. 出土有機物の保存修復に関する研究

昭和62年度

調査研究

ア　出土水浸木材の保存修復処置については，凍結乾燥法など様々な処置法が開発されているが，いずれも処理コストが高く特別な処理設備と経験が必要である。木簡などの貴重な遺物の場合にはこれらの点は抵抗なく受入れられるが，加工痕の少ない遺物などは水浸けのまま放置され，資料価値が失われてしまうことが多い。

このような欠点を改良する方法として，マニトールを含浸させて保存処理する方法の実験を行った。マニトールは，分子量160の糖類で水に良く溶ける。この溶液に木材を含浸して凍結乾燥実験を行ったところ，含浸処理期間における木材の寸法変化もなく，短時間で含浸することができた。凍結乾燥に関しても共晶点がマイナス8℃程度でポリエチレングリコールより高いことが分かり，能力が低い乾燥機でも利用できることが分かった。しかしこの処理だけでは，表面に細かい亀裂が入るためなんらかの改良する必要がある。(青木)

昭和63年度

イ　マニトールを含浸させただけでは，表面に細かい亀裂が入るが，この点を改良するための実験を行った。さまざまな含浸用樹脂についてためしたが，マニトール含浸後ポリエチレングリコールを含浸させると亀裂がなくなることが分かった。(青木)

わが国で水浸木材の保存修復処置が本格的に開始されて以来15年程になるが，近年過去に処理された遺物に亀裂や収縮などの経年劣化が目立つようになってきた。そこで処理後の水浸木材の安定性について実験的研究を開始した。本年度は環境湿度変化にともなう寸法変化について，歪ゲージを用いた計測システムにより測定，解析し，その挙動を調べた。(西浦・今津)

7.　遺跡・遺構の保存修復研究

昭和63年度

土層断面のはぎ取り処理は，かなり一般的になってきた。しかし，空隙の大きい貝層断面，緻密で水の含有量の多い粘土やローム層のはぎ取りは困難であった。貝層断面のはぎ取りを容易にするために一液性ウレタン(商品名OH-1A)によるはぎ取り実験を行った。その結果，樹脂使用量は約2kg/1m²，エポキシ樹脂で処理するよりも，およそ半分程処理時間を短縮することができた。(青木)

遺構の保存に関連して土層面の強化保存処置の現場実験を多摩ニュータウン内の法面で行っている。土中にシリコーン樹脂を含浸して土層を固定，安定化させる実験を

行ったがまだ検討課題が多い。(西浦)

8. 石造文化財の保存修復に関する研究

昭和63年度

福島県小高町，史跡・薬師堂石仏の劣化状態を定期的に調査しており，特に大屋根架設後の岩体の乾燥に伴う石仏の状態変化について調査した。

石造建造物や木造建造物の礎石等の凍結融解劣化とその防止法に関する総合的調査研究を継続して行っている。特に気象関係と劣化との関係について，温，湿度測定を中心に機器計測を行い，また AMeDAS 等基礎資料の収集を行った。

大気汚染，とくに SOx による石材の劣化現象について，劣化程度を化学的に測定，解析する方法がチェコスロヴァキアで開発されているが，この方法を日本の石材に応用できるかどうかについてチェコ国立文化財研究所の研究部長を招へいして研究協議と調査および一部予備実験を行い，今後国際共同研究として進めて行くことになった。

沖縄県首里城の復原工事に関わる石材の補修方法について，熱帯多雨の屋外条件下での耐久性を考慮した調査指導を行った。

山形県，重文・旧県会議事堂および旧県庁舎の保存修理工事に関わる石材のクリーニングと強化処置についての調査指導を行った。外壁の花崗岩のクリーニングについては，種々の方法を実地にテストし検討したが，最終的にクレンザーとワイヤーブラシによる手洗い方法を採用することとした。(西浦)

落雷によって破損した奈良県，重文・般若寺十三重塔，同，於美阿志神社十三重塔の補修方法について調査した。前者は組織の粗い花崗岩で無数の亀裂が入り，単に剝離部の接着では持続性が期待できず，後者は凝灰岩で最上部が大破しておりこの部分からの雨水の浸透が破損の原因と考えられる。今後の検討を待って修理方針を策定する必要がある。(伊原・西浦)

奈良県，重文・十輪院石仏龕の表面に線刻された仏画の剝離防止について現地調査を行った。剝落の箇所からみて裏込めに使用されたセメントモルタルの析出物と地中から毛管現象で上昇吸収した水分が影響を与えていると考えられ，この地中水の上昇を止める方法が有効と考えられる。

長野県宮田村の勒銘石は，駒ヶ岳頂上近くの天然石に銘文を刻んだものであるが，凍結劣化が著しく崩壊寸前である。この石の保存方法(接着，固定，防水処置)につい

て調査，指導を行った。

中国の石窟の保存を目的としたケイ酸カリウムによる石の強化保存処置に関する基礎実験研究を行い，SiO_2/K_2O モル比が3.8～3.9のケイ酸カリウムが有効であるとの知見を得た。（西浦）

B．特別研究

「金属文化財の材質・技法および保存に関する研究」（4か年計画の第3，第4年次，保存科学部と共同研究）

C．受託研究

昭和62年度

1．木造菊牡丹透華鬘の修復研究

岡山県立博物館所有の木造彩色華鬘（鎌倉時代）の修復法ならびに美術的研究を行った。虫害を受けた木芯部と顔料層の強化のための資材及び技法を研究すると共に，彩色残存部の図面を作成した。彩色顔料の同定は螢光X線法とX線回折法により行い，華鬘の構造をX線透過立体写真によって行った。（増田）

昭和63年度

2．太宰府出土金属製品の保存修復研究

この研究の目的は，太宰府市宝満山遺跡から発見された高さ約8cmの銅造観音菩薩像の保存修復処置とその構造，材質の調査及び原料産地の推定にある。この像は，火を受けたらしく通常の出土銅製品と違った劣化状態を示し，付着している泥は，固く固着していた。

〈保存修復〉 超音波メスによる泥のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理及びインクララックの減圧含浸による強化処置を行った。

〈分析調査〉 螢光X線分析で材質を調査した結果，純銅であることが判明した。鉛同位体比を分析したところ，原料は日本産の銅を使用したことがわかった。（青木・平尾）

3．埼玉県指定文化財天海座像の修復

木地に直接胡粉を厚く塗った下地の上に極彩色が施された，天海の寿像と考えられ

る座像である。全身に彩色層や下地層からの剝落剝離が見られる。剝落止めには，光沢の少ない接着剤が試用され好結果を得た。この接着剤の処方は昨年度の予備実験によって良好な結果を示したものを採用した。また，欠失部に対する積極的な補彩をイタリアで行われている補彩法を取り入れて行った。(増田)

4. 夜須町峯遺跡出土金属遺物の保存修復研究

この研究の目的は，福岡県夜須町峯遺跡から発見された内行花文鏡，銅剣，鉄剣，鉄戈の保存修復処置とその構造，材質の調査及び銅製品の原料産地の推定にある。

〈保存修復〉

銅製品…超音波メスによる泥のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理及びインクララックの減圧含浸による強化処置を行った。

鉄製品…エアーブラシュによる泥や錆のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，シランカップリング剤の前処理をした後アクリル樹脂の減圧含浸による強化処置を行った。

〈分析調査〉

銅製品…螢光X線による分析の結果，2面の内行花文鏡とも鉛を含んだ青銅で作られ，また，小型内行花文鏡に付着している赤色顔料は，水銀朱であることが判明した。鉛同位分析で，中国産の鉛を原料に使用したことが分かった。

ガラス製品…ＩＣＰ分析によりバリウムを多く含む鉛ガラスであることが分かった。付着している赤色顔料は，螢光X線分析で朱であることが判明した。また，鉛同位体比を測定したところ，中国産の鉛を原料に使用したことがわかった。(青木・平尾)

5. 細江町穴の谷遺跡出土銅鐸の保存修復研究

この研究の目的は，静岡県引佐郡細江町穴の谷遺跡から発見された銅鐸の保存修復処置研究と材質，原料産地の調査などにある。

〈保存修復〉 超音波メスによる泥や錆のクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理及びインクララックの減圧含浸による強化処理を行った。

〈分析調査〉 螢光X線法で材質調査を行った結果，この銅鐸は鉛を少量含んだ青銅であることが判明した。アンチモン，銀，ヒ素が痕跡程度測定されている。鉛同位体

による原料産地の推定については現在測定中である。(青木・三浦・平尾)

6. 深谷遺跡出土品の保存・修復研究

この研究の目的は，静岡県掛川市深谷遺跡から発見された和銅開珎と鏡２面の保存修復処置と材質，原料産地の調査などにある。

〈保存修復〉 顕微鏡下での針やメスを使用してのクリーニング，ソクスレー方式による脱塩処理，ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理及びインクララックの減圧含浸による強化処理を行った。和銅開珎や鏡に付着していた繊維によって和銅開珎の使用方法が分かるのでこの形状を壊さないように注意して処置を行った。

〈分析調査〉 付着していた繊維の同定は，布目順郎氏に依頼した。その結果麻(大麻？)と判定された。

銅貨自体の材質，原料産地などについては現在分析中である。(青木・平尾)

7. 可成寺金銅筒脛の保存修復研究

この研究の目的は，岐阜県兼山町に所在する可成寺に伝世した鎌倉時代の脛当の保存修復処置と鍍金飾金具の分析にある。

〈保存修復〉 鉄部分はエアーブラシュでクリーニングを行い，鍍金飾金具の緑青は顕微鏡下でメス，針などを利用して機械的に取り除いた。ソクスレー法で脱塩処理をした。シランカップリング剤を用いて鉄錆の安定化処理を行い，アクリル樹脂エマルションを減圧含浸して強化した。

〈分析調査〉 鍍金飾金具の材質を螢光X線分析した。その結果材質は純銅で，従来金鍍金されていたと言われていたものが銀鍍金していたことが判明した。(青木・平尾)

D. 科学研究費

1. 「古建築の保存を目的とした石材の凍結劣化防止法の規準化」(試験研究(1) 研究代表者 西浦忠輝，研究分担者 三浦定俊，福田正己，内田昭人，西尾雅敏，村上裕道)(昭和62年～平成元年の３年計画)

石造建造物の凍結劣化状態調査，現地の温・湿度の長期継続測定，AMeDAS データの解析を行っており，また劣化過程，保存処置方法について石造サンプルによる基礎実験研究を行っている。

2. 飛鳥～平安時代仏像彫刻の漆芸技術に関する調査研究(総合研究(A) 研究代表

者　中里壽克，研究分担者　山崎隆之，石川陸郎，浅井和春，三宅久雄)(昭和62～63年度)

飛鳥から平安時代に製作された乾漆像，木心乾漆像，木彫像，約80点について，塑形材，充塡材，整形材として用いられる漆木屎を調査した。漆木屎は古代の彫刻に一般的にみられる材料であるが，技法，材料については充分な研究が行われていない。今回の調査では，種々の材料による試料を加えて，実体顕微鏡による観察を行って古代漆木屎を実証的に研究した。

3.　プラズマ法による出土金属遺物の保存修復研究(試験研究(2)　研究代表者　青木繁夫，研究分担者　平尾良光，門倉武夫)

研究の目的は，プラズマによる出土金属遺物の保存修復法の開発と処理システムの確立にある。プラズマ化した水素などの元素を出土金属遺物の錆の原因である塩素や不安定な錆と衝突させ，その化学反応によって錆を安定化させるとともにさまざまな種類の元素のプラズマを使って遺物表面にミクロン単位の保護被膜を形成させることによって出土金属遺物の保存に役立てようとするものである。この方法は，鉄製品だけでなく銅，銀製品等の金属遺物の保存修復にも有効である。

5.　情報資料部

(1)　概　　要

情報資料部は，従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作製，収集，整理，保管，閲覧等の業務を充実発展させ，さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され，文化財に関する研究資料センターの役割を果している。この機能をより充実させ，学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため，電算機を利用した情報処理システムの基礎的な研究を行っている。

当部研究員は，上記業務を行なうとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌，美術部と共催の公開学術講座で発表されている。

調査研究

当部は，文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌，調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また，日本・東洋古美術関係の文献目録を作成しており，各年分は日本美術年鑑に掲載し，一定期間ごとに総合・増補し「日本・東洋古美術文献目録」として刊行している。現在，昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作製，収集，整理，保管，閲覧を行うとともに，各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し，資料の充実につとめている。また，これに平行して，美術研究所当時に撮影したガラス製写真原板の転写を昨年度に引続き実施した。

(2) 各　　論

A. 一般研究

1. 美術史関係学術情報処理に関する研究

学術情報の著しい増加と需要の多様化傾向に対応すべく美術史研究資料を中心とした情報処理システムの研究を美術部と共同で行った。なお，科学研究費の項参照。

2. 日本古代中世美術の研究

(1) 絵巻物の研究

昭和62年度

高僧伝絵研究の一環として，法然伝絵の成立過程における法華経霊験図の介在の様相についての分析を行った。(米倉)

昭和63年度

法然伝絵の研究を継続するとともに，鎌倉時代の似絵画家関係資料の収集を行ない，主として藤原信実以降の画家たちに関する研究を進めた。(米倉)

(2) 中世水墨画の研究

昭和62年度

旧笹間家蔵扇面画帖の詳細な調査を行い，扇面に関する基礎データを集積した。(鈴木・井手・島尾)南北朝・室町絵画の画讃資料の整理・研究をすすめた。(島尾)

昭和63年度

下記のコレクション・作品の調査を行った。1)メトロポリタン美術館・ボストン美術館・フリーアギャラリーなど在米の室町水墨画コレクション。(島尾) 2)群馬県立近代美術館。(井手) 3)泉龍寺蔵白崖宝生像。(島尾・井手)

3. 近世絵画史の研究

昭和62年度

国際交流美術史研究会第6回国際シンポジウム「肖像」(京都62.3)に参加し桃山時代の肖像画の問題点について発表を行った。(鈴木)

昭和63年度

昭和61年度，東京都教育委員会・日野市教育委員会の日野高幡不動(金剛寺)文化財調査に参加し，絵画調査を行ったが，調査作品の中から加藤信清筆「阿弥陀三尊像」を選び，詳細な調査を行った。調査・研究の成果を「美術研究」誌上に発表した。(鈴木)

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と当研究所の共同主催になる国際シンポジウム，Japanese Art History : The State of the Field(バークレー, 63.2)に参加し，17世紀につくられた名所案内記を通じてみた画家の社会的位置に関する発表を行った。(鈴木)

4. 中国画研究

昭和62年度

富岡鉄斎手録の解読を継続し，中国絵画関係および来舶画人関係資料の調査を行った。また，北京・台北において中国絵画の動向の調査を行い，台北・文化建設委員会の文化資産保存会議に出席した。(鶴田)

中峰明本像を中心に中国より請来された肖像画の研究を進めた。(井手)

昭和63年度

富岡鉄斎手録の解読を継続し，中国絵画関係および来舶画人関係資料の調査を行った。

台北・国立歴史博物館の「張大千先生九十紀念学術研討会」に出席して発表を行い，

調査研究

中央研究院及び国立中央図書館において台湾の美術運動に関する資料を調査した。

沖縄県立博物館所蔵殷元良他の調査を行った。(鶴田)

中峰明自本賛像の特色を分析するとともに,その成果を美術研究に発表した。(井手)

B. 科学研究費

「**美術史学研究支援画像処理モデルの開発**」(試験研究(1) 研究代表者 米倉迪夫 研究分担者 井手誠之輔,島尾 新,鈴木廣之,有川治男(国立西洋美術館),伊與田光宏(千葉工業大学),奥平俊六(大阪府立大学), 木村三郎(日本大学), 鯨井秀伸(MOA美術館),高見沢明雄(東京国立博物館),中部義隆(大和文華館), 早川聞多(国際日本文化研究センター),林 進(大和文華館), 藤田伸也(大和文華館), 丸山伸彦(国立歴史民俗博物館)

美術史研究においては,作品に関する視覚的な情報が最も重要である。本研究では,これに対するコンピュータテクノロジーからのアプローチとして,デジタル画像処理技術の美術史研究への応用の可能性を探った。具体的には,

1) デジタル画像処理による美術作品の分析方法の研究

2) 画像データベース構築のための諸条件の研究と小規模データベースの作成

3) 画像情報と文字情報とをリンクした美術史研究支援システム実現のためのモデル開発

を目的とした。

昭和62年度

1) 従来の視覚的・光学的な作品分析の方法と,デジタル画像処理の基本機能(空間フィルタリング,アフィン変換, 論理フィルタリング, ヒストグラム計算等)とを比較して画像処理機能の個別評価を行い,作品分析への応用の基本条件の検討を行った。

画像処理の基本機能を複合する必要のあるシミュレーション,分析,計測等の処理に関してルーチン化の手順,条件および問題点の検討を行った。

2) 一次資料(原作品)と二次資料(焼付写真, フィルム, 印刷物等)との質的・量的な差異による画像の精度(画素単位の深さ・分解能)の基準値に関する検討を行った。デジタル画像データベースの検索システムの機能・条件の検討を行った。

3) 上記の結果を踏まえて，以下の事項について具体的な仕様の検討を行った。

ホストコンピュータ(Micro VAX II，PC-9801)とイメージプロセッサとのインターフェースおよびハンドラ。

美術史研究用画像処理ルーチンのパッケージ化または簡易言語化。

ホスト側の DBMS と光ディスク装置とのインターフェイス。

4) イメージプロセッサの導入

イメージプロセッサとして nexus 6810 を導入し，東京国立文化財研究所に設置した。プロセッサは，Micro VAX II および PC-9801 VM2 を接続し，これをホストコンピュータとした。

昭和63年度

1) 前年度に引続き画像処理の基本機能を複合する必要のあるシミュレーション，分析，計測等の処理に関してルーチン化の手順，条件及び問題点の検討を行い，デジタル画像処理の基本機能にグラフィック機能を組合せて個々の作品分析の方法に適合した操作性の良いソフトウェアの開発を行った。

2) デジタル画像データベースの検索システムの機能・条件を検討を行い，市販のデータベース・ソフトウェアを登載したパーソナル・コンピュータをホストとする画像データベースのモデルの作成を行った。

3) ホストコンピュータ(PC-9801シリーズ)からイメージプロセッサ(nexus 6800)を操作するハンドラを作成した。

4) 大和文華館美術研究所において10月25日，東京国立文化財研究所において3月11日，公開研究会を行った。

5) 本研究の成果を報告書にまとめた。

6. 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

人類の貴重な文化遺産として国際的に高く評価されている中国の敦煌莫高窟壁画は経年による剝落等の損傷が著しく，その保存修復の対策が急務となっている。昭和59年の日中両国外相会議並びに昭和60年および昭和62年の日中文化交流政府間協議において，これらの保存に関する日中協力が合意された。当研究所は昭和61年度からこれに関わる調査研究事業を政府開発援助(O. D. A)予算として認められ，昭和62・63年

調査研究

度においては下記の事業を実施した。

(1) 敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

本事業の進め方について総合的な検討を行うため，美術史，保存科学，環境保全，修復技術等にかかる専門家からなる12名の委員，当研究所の関係者，文化庁の担当者による会議を現地調査の後２回――昭和62年３月29日と昭和63年12月23日――開催した。

(2) 中国への専門家の派遣

第二回，第三回訪中団として下記のメンバーが訪中し，本調査研究事業の今後の進め方等について中国側関係者――中国文化部文物局，対外連絡局，文物保護科学研究所，敦煌研究院関係者――と協議を行い，また，敦煌滞在中敦煌莫高窟壁画の保存状態，環境条件等の現地調査を行った。

昭和63年３月15日～28日（第二回）

団長　濱田　隆（東京国立文化財研究所長）
廣田史郎（文化庁伝統文化課長）
河原純之（文化庁記念物課主任文化財調査官）
高橋英紀（北海道大学助教授）
江本義理（東京国立文化財研究所名誉研究員）
三浦定俊（　〃　保存科学部主任研究官）
西浦忠輝（　〃　修繕技術部主任研究官）

昭和63年10月29日～11月15日（第三回）

団長　濱田　隆（東京国立文化財研究所長）
狩野　久（文化庁記念物課主任文化財調査官）
増田勝彦（東京国立文化財研究所修復技術部第二修復技術研究室長）
三浦定俊（東京国立文化財研究所保存科学部主任研究官）
西浦忠輝（　〃　修復技術部主任研究官）
江本義理（　〃　名誉研究員）
神庭信幸（国立歴史民俗博物館助手）

(3) 中国からの専門家の招へい

昭和63年5月1日～5月30日，殷文傑敦煌研究院長を招へいし，日中共同研究の基本的進め方について協議を行った。

また，昭和63年10月2日～10月16日，樊錦詩敦煌研究院副院長ら5名を招へいし，今後の日中共同研究計画について協議を行った。

(4) 敦煌研究院文化財保存修復担当者への技術指導

平成元年2月7日～3月28日，敦煌研究院李実館員他1名を受け入れ，文化財の保存に係わる気象環境条件の機器計測技術の研修を行った。

7. 主要研究業績

①：著書・編書　②：論文　③：解説　④：研究発表
⑤：講演・放送　⑥：その他　昭和62.4～平成1.3

美　術　部

昭和62年度

関口　正之(美術部長)

③ 富岡美術館蔵法華経絵　「美術研究」340　62.11

三宅　久雄(第一研究室長)

④ 東洋美術における転換期の諸問題　西川新次「彫刻における藤原様式成立の事情」(仏教芸術71号)を読んで　美術部・情報資料部研究会　62. 5

④ 浄土宗成立期における彫刻界の動向　文化財の保存および修復に関する国際研究集会　62.10

⑤ 関東の鎌倉彫刻　朝日カルチャーセンター　62. 4

⑥ 回顧と展望(日本中世彫刻)　「史学雑誌」96-5　62. 5

三輪　英夫(第二研究室長)

① 黒田清輝・藤島武二(共著)「20世紀日本の美術」11　集英社　62. 5

② 百武兼行小論　―「ピエトロ・ミッカ図」をめぐって―　「美術研究」342　63. 3

③ 藤島武二と金山平三　「絵」278　62. 4

③ 矢崎千代二年譜　「矢崎千代二展図録」横須賀市　62. 9

③ 明治洋画の革新と確立―「明治洋画壇の巨匠たち展図録」板橋区立美術館　62. 9

調査研究

③ 作家略歴(久米桂一郎他)　「久米桂一郎と白馬会の友たち展図録」
久米美術館　62.10

④ 明治洋画と歴史画　美術部・情報資料部公開学術講座　62.11

⑤ 黒田清輝—人と作品　北九州市立美術館　62. 8

⑤ 明治洋画の展開—白馬会から文展へ　板橋区立美術館　62. 9

田実　栄子(主任研究官)

② 片倉家伝来陣羽織二領　上　「美術研究」341　63. 1

③ 第24回日本伝統工芸染織展鑑査委員および授賞作品解説　62. 4,5

③ 片倉家伝来黒繻子小袖の鉄媒染損傷の修理に関して
東京国立文化財研究所修復技術部での実例解説　63. 2

④ 染織・服飾関係項目執筆　日本大百科全書　全25巻　小学館　63. 3

④ 桃山から江戸へ—服飾と染織
上智大学比較文化研究所・江戸時代研究シリーズ　62. 6

⑤ 上杉家伝来謙信・景勝所用服飾類について　山形県米沢市上杉神社　62. 6

井上　一稔(第一研究室)

④ 宝冠阿弥陀如来像試論　美術史学会西支部例会　62. 7

佐藤　道信(第二研究室)

② 鑑画会再考　「美術研究」340　62.11

③ 矢代幸雄『日本美術の再検討』書評　東京大学新聞　62. 7

④ 在外近代日本画とジャポニスム　東京国立文化財研究所総合研究会　62. 6

④ 近代の水墨　美術部情報資料部研究会　62. 6

山梨絵美子(第二研究室)

③ 作品解説・文献目録　Paris in Japan 展図録
アメリカ・ミズーリ州セントルイス，ワシントン大学美術館　62. 9

⑤ Paris in Japan 展列品解説
アメリカ・ミズーリ州セントルイス，ワシントン大学美術館　62. 9

⑥ 日本近代洋画家自筆文献抜粋翻訳　Paris in Japan 展図録　62. 9

昭和63年度

関口　正之(美術部長)

① 図説日本の仏教（第２巻，密教） 新潮社 63. 7

① 垂迹画（日本の美術274） 至文堂 1. 3

② 尾道市持光寺蔵釈迦八相図について(五) 「美術研究」344 1. 3

③ 千葉県野田市普門寺蔵仏涅槃図 「美術研究」344 1. 3

三宅　久雄(第一研究室長)

④ 重源・法然と運慶・快慶 第41回美術史学会全国大会 63. 5

④ Kaikei and the Early Jodo Community

77th Annual Meeting of the College Art Association, Inc. (CAA) 1. 2

三輪　英夫(第二研究室長)

③ 佐賀の生んだ明治の洋画家

「佐賀の生んだ明治の洋画家展図録」 久米美術館 63.10

③ 作品解説(岸田劉生「麗子像」他)

「凹版美術集・日本名画シリーズ１」 大蔵省印刷局 63.11

③ 明治中期の洋画 「現代の眼」409 63.12

⑤ 黒田清輝について 福島県立美術館 63. 9

田実　栄子(主任研究官)

① 朝鮮朝末期王室服飾(共著) 源流社 63. 7

④ 雪持の文様について 美術部・情報資料部研究会 63. 7

⑤ 伊達政宗時代の服飾品 仙台市博物館 63. 5

⑤ 室町・桃山時代の陣羽織と鎧下着 美術部・情報資料部公開学術講座 63.12

井上　一稔(第一研究室)

② 螺髪宝冠阿弥陀如来像について 「美術研究」343 1. 2

④ 仏教彫刻史上に於る檀像の意義 東京国立文化財研究所総合研究会 63. 6

④ 螺髪宝冠阿弥陀如来像について 美術部・情報資料部研究会 63. 7

④ 十一面観音像の表現について 美術部・情報資料部公開学術講座 63.12

⑥ 近江の破損仏・雑感 「湖国と文化」44 63. 7

佐藤　道信(第二研究室)

② 維新後の狩野派と芳崖 狩野芳崖展図録(下関市立美術館) 1. 1

同　展 (京都国立博物館) 1. 3

調査研究

② 水墨の変容—フェノロサ・ビゲロー旧蔵二作を中心に 「美術研究」344 1. 3

③ 芳崖とその周辺 「芸術公論」28 63.11

⑤ 文展草創期の東京画壇 山種美術館 63. 9

⑤ 鑑画会とフェノロサ 国際シンポジウム〝日本近代美術と西洋〟 63.11

⑤ フェノロサと鑑画会 京都国立博物館 1. 3

山梨絵美子(第二研究室)

② 竹久夢二の美術史的位置をめぐって 「竹久夢二展図録」博物館明治村 63. 5

④ 黒田清輝の風景表現とその影響

国際シンポジウム〝日本近代美術と西洋〟 63.11

④ Studies of "Western-style" Japanese Painting: East Meets West?

第77回CAA(米国美術史学会) 1. 2

⑤ 港区ゆかりの画家・日本近代洋画の巨匠黒田清輝 港区郷土史料館 63.12

⑥ 私の見たい美術館⑬～㉕ 「絵」287～299 63.1～12

芸 能 部

昭和62年度

三隅 治雄(芸能部長)

① 舞踊・その愛のしぐさ(NHK市民大学講座テキスト) 日本放送出版協会 62.10

② 民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究(第二部)

——後継者養成と学校教育—— 「芸能の科学」16 63. 3

③ 芸能伝承(座談会) 「三田評論」889号 63. 2

④ 韓国の伝統芸能(シンポジウム。同席パネラー 李勝烈・金両基・草野妙子)

韓国文化学院 62. 5

④ 民謡の流転 日本民俗学会談話会 63. 1

⑤ 舞踊・その愛のしぐさ 市民大学講座 NHK・TV 62.10～12

⑤ 歌の人生 芸能部公開学術講座 62.12

⑥ 日本古典音楽文献解題(担当項目執筆) 講談社 62. 9

佐藤 道子(演劇研究室長)

② 「唱礼」について 「東洋音楽研究」50 61. 7

④ 「醍醐寺季中行事」・「年中行事　上古」の成立と悔過会　顕密仏教研究会　62. 5

⑤ 東大寺修二会について　トロント大学R. E. E. D.　62.10

⑤ 日本における仏教典礼の諸形式　トロント大学　62.10

⑥ 「朝長」と観音懺法　「能楽鑑賞の栞」57　62. 4

⑥ 日本古典音楽文献解題(担当項目執筆)　講談社　62. 9

廣瀬　美都(演劇研究室)

② 悔過会所用の〔大懺悔〕と〔三十二相〕　「芸能の科学」16　63. 3

③ 東京芸術大学創立100周年記念貴重図書展(解題)　62.11

⑥ 日本古典音楽文献解題(担当項目執筆)　講談社　62. 9

蒲生　郷昭(音楽舞踊研究室長)

① 日本美術に表現された音楽場面
——平安時代から江戸時代までの絵画にみられる楽器の描き起こし図録——
「国立音楽大学音楽研究所年報」第7集別冊(共著)　63. 3

② 初期の三味線を絵画に見る(3)(4)　「季刊邦楽」51～52　62. 6～9

② 描かれた語り物琵琶　「国立音楽大学音楽研究所年報」第7集　63. 3

④ 日本音楽研究の視点　芸能部夏期学術講座　62. 7

⑥ 能・狂言事典(音楽関係項目)　平凡社　62. 6

⑥ 日本古典音楽文献解題(共同編集と担当項目執筆)　講談社　62. 9

⑥ (学会報告　—研究発表を聞いて—)　「東洋音楽学会会報」12号　62.12

高桑いづみ(音楽舞踊研究室)

② 平岩流唱歌をめぐる一考察　「能　研究と評論」15号　62. 5

② ヌク地考　「芸能の科学」16　63. 3

③ 東京芸術大学創立100周年記念貴重図書展(解題)　62.11

⑥ 能・狂言事典(能楽囃子関係項目)　平凡社　62. 6

⑥ 日本古典音楽文献解題(能関係項目)　講談社　62. 9

羽田　昶(民俗芸能研究室長)

⑥ 復曲「生贄」評　「梅若」280号　62. 5

⑥ 能・狂言事典(共同編集と担当項目執筆)　平凡社　62. 6

⑥ 日本古典音楽文献解題(能関係項目)　講談社　62. 9

調査研究

⑥ 復曲「横山」共同演出　能楽鑑賞の会　62.11

⑥ 復曲「武文」演出補佐　国立能楽堂研究公演　62.12

中村　茂子(主任研究官)

② 民俗芸能の分布Ⅱ・風流——その季節的・地方的特色——
実践女子大学「MUSEOLOGY」第6号　62. 4

② 秋田のささら獅子舞　「芸能史研究」98号　62. 7

② 獅子踊歌の歌詞構成様式——秋田県・埼玉県を中心に——
「民俗芸能研究」第6号　62.11

② ささらと芸能—箒を使用する風流踊を中心に—　「芸能の科学」16　63. 3

仲井幸二郎(民俗芸能研究室)

② うたと風土——富山に定着しなかった唄——　「魚津シンポジウム」3号　63. 3

③ 決定版ふるさとの民謡・曲目解説(173曲)　キングレコード　62. 4

③ 口訳民謡集83—94(連載)　「みんよう文化」106～117　62.4～63.3
弥三郎節・農兵節・宮津節・関の鯛つり唄・三国節・八戸小唄・麦や節
南部木挽唄・福知山音頭・櫨取唄・鹿児島小原良節・デカンショ節

③ 民謡表記の問題点　「魚津国文」11号　62.11

③ 宮城の唄・富山の唄　「魚津国文」12号　63. 3

⑤ 民謡の分類　ビクター民踊研究会(箱根)　62. 6

⑤ 民謡今昔　財団法人日本民謡協会民謡教養講座　62. 7

⑤ 祝い歌の類型　芸能部公開学術講座　62.12

⑤ 「うた」と「おどり」　日本民踊研究会富山県支部研修会(高岡)　63. 1

⑤ うたと風土　富山民俗の会(富山)　63. 1

昭和63年度

佐藤　道子(芸能部長)

② 法華八講会——成立のことなど——　「文学」57—2　1. 2

② 伝統芸能の保存組織のあり方の研究——東大寺修二会の伝承基盤——
「芸能の科学」17　1. 3

④ 「唱礼」について　東京国立文化財研究所総合研究会　63. 5

④ 醍醐寺の法華八講会(1)　顕密仏教研究会　63. 6

④ 顕密法会論　芸能部夏期学術講座　63. 7

④ 醍醐寺の法華八講会(2)　顕密仏教研究会　63.10

⑥ 声明の現状と今後の展望　「WACOA」14　1. 3

⑥ 伝統の響――声明――(構成解説)　サントリーホール　1. 3

羽田　昶(演劇研究室長)

① 講座　能・狂言VI『能鑑賞案内』(編集協力と担当項目執筆)　岩波書店　1. 3

② 能楽における後継者養成の現状――国立能楽堂三役研修の事例を中心に――
「芸能の科学」17　1. 3

⑤ 能・狂言の伝承と教育　舞踊学会　63. 5

⑤ 囃子の役割　芸能部公開学術講座　63.12

⑥ 日本音楽大事典(担当項目執筆)　平凡社　1 .3

鎌倉　恵子(主任研究官)

① 歌舞伎評判記集成第二期(翻刻　共同)第3巻～第5巻　岩波書店　63.7～1.3

② 古浄瑠璃における夢　「立教大学日本文学」第61号　63.12

② 道行の節付け小考――加賀掾と義太夫――　「芸能の科学」17　1. 3

④ 浄瑠璃の夢　東京国立文化財研究所総合研究会　63.10

⑥ 国語国文学界の展望(Ⅱ)近世(演劇)　「文学・語学」第120号　1. 3

⑥ 日本音楽大事典(担当項目執筆)　平凡社　1. 3

廣瀬　美都(演劇研究室)

⑤ 醍醐寺の<大懺悔>と<三十二相>　顕密仏教研究会　63. 7

⑥ 日本音楽大事典(担当項目執筆)　平凡社　1. 3

蒲生　郷昭(音楽舞踊研究室長)

② 日本音楽の用語　岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」第1巻　63. 7

③ 音楽の伝播と受容(山口修と共同執筆)
岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」第3巻　63.10

③ 音楽の理論・楽器・身体(徳丸吉彦と共同執筆)
岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」第5巻　1. 2

⑥ 岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」第1～6巻(共同編集)　63.6～(刊行中)

⑥ 音楽の成立と展開(座談会)　岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」第2巻　63. 6

調査研究

⑥ 日本音楽大事典(共同監修と担当項目執筆) 平凡社 1. 3

高桑いづみ(音楽舞踊研究室)

④ ヌク地考 東洋音楽学会例会 63. 7

④ 大鼓と小鼓の折り合い 芸能部公開学術講座 63. 12

中村 茂子(民俗芸能研究室長)

② 伝統芸能の保存組織のあり方の研究——民俗芸能保存会の事例を中心に——
「芸能の科学」17 1. 3

④ 民俗芸能の採り物 民俗芸能研究会 63. 6

⑥ 今，何とかしなければ 「みんよう文化」127 1. 1

三村 昌義(民俗芸能研究室)

② 謡曲「家持」——典拠とその周辺—— 「魚津シンポジウム」第4号 1. 1

⑤ 古今集注釈の世界——謡曲との関わり—— 第7回池田弥三郎記念講演会 63. 7

⑤ 怪談と怪談咄 FM富山「サウンドスコープ」 63. 7

⑤ 雷鳥の文学 滑川市民教養講座 1. 3

⑤ 謡曲「善知鳥」と立山地獄 滑川市民教養講座 1. 3

⑥ 折口信夫辞典(「伝承」「まひ・をどり」の項) 大修館書店 63. 7

保存科学部

昭和62年度

馬淵 久夫(保存科学部長)

② 鉛同位体比による原料産地推定 「出雲岡田山古墳」島根県教育委員会 62. 3

② 東アジア鉛鉱石の鉛同位体比(平尾と共同) 「考古学雑誌」73-2 62. 12

② 真砂遺跡出土の江戸時代に製造されたガラス容器の化学組成(富沢，薬袋，富永と共同) 「真砂遺跡」 62. 12

② 三ツ寺Ⅰ遺跡西辺第1張出部出土の羽口・るつぼおよび土器付着物の化学組成（平尾と共同） 「三ツ寺Ⅰ遺跡」群馬県教育委員会 63. 3

② 鳥羽遺跡出土青銅器の鉛同位体比 「鳥羽遺跡」群馬県教育委員会 63. 3

② 長野県出土青銅鏡の鉛同位体比測定 「長野県史」長野県史刊行会 63. 3

⑤ 青銅器の鉛同位体比測定

昭和62年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修(奈良国立文化財研究所) 62. 10

⑤ 文化財の保存 指定文化財展示取扱講習会(京都国立博物館) 62. 12

⑤ 鉛同位体から見た東西文化の交流

昭和62年度文化財等取扱い講習会(岩手県立博物館) 63. 1

⑤ 科学と文化財 科学ゼミナール(電力館) 63. 3

平尾 良光(化学研究室長)

② 東アジア鉛鉱石の同位体比 —青銅器との関連を中心に— (馬淵と共同)

「考古学雑誌」73 62. 12

② 東京湾底泥に残された鉛汚染の歴史「沿岸海洋環境シンポジウム論文集」 63. 2

② 三ツ寺Ⅰ遺跡西辺第1張出部出土の羽口・るつぼおよび土器付着物の化学組成(馬淵と共同) 「三ツ寺Ⅰ遺跡」群馬県教育委員会 63. 3

② 法隆寺献納宝物金銅仏の蛍光X線分析による材質の調査

「法隆寺献納宝物特別調査概報 Ⅷ(金銅仏4)」 63. 3

③ 重量法による定容(内田と共同) 「ぶんせき」144 62. 10

③ 東京湾底泥に残された鉛汚染の歴史 「海洋科学」19 62. 12

見城 敏子(物理研究室長)

② 大歳御祖神社拝殿内柱の白化現象 「保存科学」27 63. 3

④ Discoloration and Deterioration of Certain Wooden Material Irradiated by the Sunlight. 6th International Restorer Seminar, Hungary 62. 7

④ Investigation of Sun Shining a Japanese Historical Wooden Building by Use of Photo-Monitoring Strips

8 th Meeting of ICOM-Committee for Conservation, Sydney

62. 9

⑤ 文化財の保存環境と対策

第9回文化財虫菌害保存対策研修会 (財)文化財虫害研究所 62. 7

⑤ 文化財保存環境のチェックモニターと文化財の保存法

(i) ボロブドール保存事務所(インドネシア) 62. 9

(ii) バンコック国立博物館(タイ) 62. 9

⑤ 漆工品の保存および取り扱い 埼玉県立博物館 63. 1

調査研究

新井　英夫(生物研究室長)

① Biological Investigations「Wall Paintings of the Tomb of Nefertari」
The Getty Conservation Institute　62. 7

② 酸性紙の中和について（第3報)ジエチル亜鉛による雑誌類の中和処理条件と装置(宮地，石木田，井上，森と共同)　「文化財の虫菌害」13　62. 11

② ネフェルタリ王妃墓の微生物について　「保存科学」27　63. 3

③ Foxing 形成要因の究明　「発酵と工業」45　62. 10

④ エジプトのネフェルタリ王妃墓の生物学的調査(森，林と共同)
第9回古文化財科学研究会大会　62. 5

④ On the Foxing-Causing Fungi
8 th Meeting of ICOM-Committee for Conservation, Sydney
62. 9

⑤ 文化財の微生物による被害とその防除
(第9回文化財虫菌害保存対策研修会)　㈶文化財虫害研究所　62. 7

⑤ 文化財の保存(劣化Ⅱ）昭和62年度指定文化財展示取扱い講習会　文化庁　62. 7

⑤ 日本における文化財の生物劣化と防除の研究
(i)　ボロブドール保存事務所(インドネシア)　62. 9
(ii)　バンコック国立博物館(タイ)　62. 9

⑤ 文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会
㈶文化財虫害研究所　63. 2

⑥ 文化財保護と微生物　筑波大学　第2学群　農林学系　総合科目　62. 5

門倉　武夫(主任研究官)

② 白色顔料による紙の劣化制御　「古文化財の科学」32　62. 3

② A Preliminary Report on the Examination of Crystals Found on Oil Paintings in Japan Using Non-Destructive X-ray Diffraction
8 th Meeting of ICOM-Committee for Conservation, Sydney　62. 9

② タイ美術展展示品の腐食生成物の分析　東京国立博物館　62. 9

② 木造菊牡丹透華鬘の顔料の分析(岡山県立博物館)　受託研究報告　62. 9

② 考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究　科学研究費報告書　63. 3

② 米和泉遺跡出土土器・漆器類の赤色顔料の分析「金沢市米和泉遺跡」
石川県埋蔵文化財センター 63. 3

石川 陸郎(主任研究官)

② 古文化財とX線写真(3) 「軟X線の科学」2, 3, 4 62. 8

⑤ 文化財の保存(環境) 指定文化財(美術工芸品)展示取扱講習会
東日本ブロック 62. 8
西日本ブロック 62. 12

⑤ X線写真の撮影と読み方 指定文化財修理技術者(美術工芸品)講習会 62. 10

三浦 定俊(主任研究官)

② 高エネルギーX線スキャナによる金銅仏の調査(藤井と共同)
「古文化財の科学」32 62. 12

② 和紙の劣化に対する明礬の影響(増田と共同) 「古文化財の科学」32 62. 12

② 史跡・薬師堂石仏における凍結破壊の発生(西浦と共同) 「保存科学」27 63. 3

② 鹿田遺跡出土ガラス滓(刈谷と共同) 「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」3 63. 3

② Climates that Cause Frost Shattering of Stone Objects
(西浦, 福田と共同) 「Senri Ethonological Studies」23 63. 3

④ 和紙とドーサ(増田と共同) 第9回古文化財科学研究会大会 62. 5

④ 光学的方法による青色顔料の判別 第9回古文化財科学研究会大会 62. 5

④ 鶴林寺太子堂柱絵の調査(柳澤・秋山と共同)
第4回日本文化財科学会大会 62. 6

④ Emissiography and Reflectography of Ornamented Columns
The 8th Meeting of ICOM Committee for Conservation(Sydney) 62. 9

④ Temperature and Humidity in a Large Showcase for a Temple Hall
The 8th Meeting of ICOM Committee for Conservation(Sydney) 62. 9

④ 古文化財研究における光画像計測 東京国立文化財研究所総合研究会 62. 11

⑤ 科学写真撮影の実際(石川と共同)
昭和62年度指定文化財(美術工芸品)修理技術者講習会 62. 11

山野 勝次(生物研究室)

② ヤマトシロアリの摂食量に及ぼす固体数・兵蟻割合・温度の影響

調査研究

「しろあり」70　62.10

② Physical Control of the Formosan Subterranean Termite, *Coptotermes formosanus* Shiraki

Proceedings of the International Symposium on the Formosan Subterranean Termite (Hawaii, 1985)　62.10

② ヤマトシロアリの群飛後3カ月間における産卵と幼虫の発育について

「しろあり」71　63. 1

③ シロアリの生態と防除対策　「遺伝」41　62. 6

③ 暗黒の住者　―シロアリ研究の手引(4)―　「文化財の虫菌害」13　62.10

③ 暗黒の住者　―シロアリ研究の手引(5)―　「文化財の虫菌害」14　63. 3

⑤ 文化財の虫害と対策(第9回文化財虫菌害保存対策研修会)

㈶文化財虫害研究所　62. 7

⑤ シロアリの生態に関する実務知識(昭和62年度しろあり防除施工士資格第2次講習会)　㈳日本しろあり対策協会　62. 9

⑤ シロアリに関する知識(昭和63年度しろあり防除施工士資格第1次講習会)

㈳日本しろあり対策協会　63. 1

⑤ 文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会

㈶文化財虫害研究所　63. 2

⑥ 冷汗かいたシロアリ運び　「しろあり」69　62. 7

昭和63年度

馬淵　久夫(保存科学部長)

② 井上コレクションの金属器の鉛同位体比

「井上コレクション弥生・古墳時代資料図録」言叢社　63. 6

⑤ 鉛で探る青銅器のルーツ　昭和63年度文化財講座(大阪文化財センター)　63. 5

⑤ 銅鐸の型式分類と鉛同位体比

マイクロビームアナリシス第141委員会第56回研究会(鳴門教育大学)　63. 5

⑤ 考古遺物に科学の光を当てる

日本考古学セミナー(朝日カルチャーセンター)　63. 9

⑤ 鉛同位体による青銅器原料産地の推定

第3回「大学と科学」公開シンポジウム(東京・朝日ホール)　1. 2

⑥ 文化財研究と自然科学(佐原，小池との鼎談)　「文化庁月報」238　63. 7

平尾　良光(化学研究室長)

② 炭素炉原子吸光法による標準岩石中の鉛の定量(松本，斉藤，木村と共同)

「分析化学」　63. 4

② 法隆寺献納宝物　金銅仏の蛍光X線分析による材質の調査

「法隆寺献納宝物特別調査概報　IX」「金銅仏5」　1. 3

④ 出土鉄製品の脱塩処理について(青木と共同)

第10回古文化財科学研究会講演会大会　63. 5

④ 鉄器保存処理における塩素の挙動について(青木と共同)

歴史民俗博物館研究講演会　63. 6

④ 鍍金の分析調査について　昭和63年度　文化財保存修復研究協議会　63. 12

⑤ 科学的方法による出土遺物の生産地推定　富山大学理学部　63. 12

⑤ 鉛同位体比法による古代青銅器の原料産地推定　都立大学理学部　1. 2

見城　敏子(物理研究室長)

② 文化財の保存(1)　先人たちの知恵に現代の技術を生かして

「Better Storage」102　63. 7

② 文化財の保存(2)　文化財保存のための調湿紙の利用

「Better Storage」103　63. 9

② 文化財の伝統漆工技術として塗りと乾燥　「塗装と塗料」443　63. 11

② 漆液と塗膜の機器分析　「塗装と塗料」444　63. 12

② 伝統的下地固めの技法と保存について　「保存科学」28　1. 3

③ 漆の技術を現代に生かす　「Wood・PRO」3　1. 1

④ Scientific Approach to the Urushi Grounding Technique

12th IIC-Kyoto Congress　63. 9

④ 無紫外ランプの改良に関する研究(放射の応用・関連計測研究会)

照明学会　63. 10

⑤ 文化財の漆化学　田島うるし研究会　63. 7

⑤ 文化財の保存環境と対策(第10回文化財虫菌害保存対策研修会)

調査研究

文化財虫害研究所　63. 7

⑤　文化財の保存について　新潟県教育委員会　63. 8

新井　英夫(生物研究室長)

②　文化財劣化真菌　「防菌防黴誌」16　63. 6

②　酸性紙の中和について　(第4報)ジエチル亜鉛による書籍類中和処理と紙質の強度変化並びに保存性(宮地，石木田，木村，井上，森と共同)

「文化財の虫菌害」16　63. 11

②　紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究　(第8報) Foxing 部位の構成成分について(根本，松井，松村，村北と共同)　「保存科学」28　1. 3

③　絵画や本の褐色斑点の正体は？　「青淵」471　63. 6

④　燻蒸後に発生する臭気成分について(宮地，井上と共同)

第10回古文化財科学研究会講演会大会　63. 5

④　Biological Investigations on the Formation Mechanism of Foxing (Matsui, Matsumura, Murakita と共同)　12th IIC-Kyoto Congress　63. 9

④　A Closed System for Preventing Fungal Growth in Cultural Properties (Kenjo と共同)

International Conference on Biodeterioration of Cultural Property

(India, Lucknow)　1. 2

⑤　文化財保存科学における生物学的研究と加害生物防除法の実際について

中華人民共和国　文物保護科学技術研究所　63. 6

⑤　文化財の微生物による被害と対策

(第10回文化財虫菌害保存対策研修会)　㈶文化財虫害研究所　63. 7

⑤　藤ノ木古墳石棺内環境の保存科学的調査報告　藤ノ木古墳発掘調査委員会　63. 8

⑤　図書館における書籍のむし・かびと保存の知識

(昭和63年度東北大学付属図書館総合研修会)東北大学付属図書館　63. 10

⑤　我が国における文化財の生物劣化と防除の研究(アジア太平洋地域文化活動推進セミナー—文化遺産の重要性とその保存・活用—)

㈶ユネスコアジア文化センター　63. 11

⑤　文化財の虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会

(財)文化財虫害研究所　1. 2

⑤　ジエチル亜鉛による酸性紙の中和について

国立国会図書館資料保存対策研究会　1. 3

⑥　文化財の保護と微生物　筑波大学第２学群　農林学系総合科目　63. 5

門倉　武夫(主任研究官)

②　The Concentration of NO_2 in the Museum Environment and Its Effects on the Fading of Dyed Fabrics

Preprints of the Contributions to the Kyoto Congress　63. 9

②　蛍光X線分析法による蒔絵柱の分析　国宝中尊寺金色堂附古材調査報告書　1. 3

②　非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査法の確立とその応用に関する研究　科学研究費報告書　1. 3

②　文化財保存における大気汚染の影響評価

科学研究費重点研究人間環境班63年度研究成果報告書　1. 3

③　環境汚染と文化財の保護　「産業公害」24　63. 12

石川　陸郎(主任研究官)

③　欧州博物館における展示環境の実状　「博物館研究」23　63. 5

⑤　セミナー　日本における展示保存環境　韓国中央博物館　63. 7

三浦　定俊(主任研究官)

①　光学的方法による調査と物理測定「In Darkness and Light」

石橋財団ブリヂストン美術館所蔵レンブラント作品調査研究報告　1. 3

②　近赤外線画像処理による緑青と群青の判別　「古文化財の科学」33　63. 12

②　石仏の劣化とその保存に関する科学的研究

「福武学術文化振興財団昭和62年度年報」　63. 8

②　近赤外分光計測による絵画材料の同定と画像の復元に関する研究

「鹿島学術振興財団昭和62年度年報」　63. 11

④　微分処理によるX線画像の鮮明化（大橋と共同）

第10回古文化財科学研究会講演会大会　63. 5

④　アナログ微分処理によるX線画像の鮮明化

第10回 RESES シンポジウム　63. 8

調査研究

④ Image Processing of X-ray Photographs by One-dimensional Analog Spatial Differential Treatment（大橋と共同）

第12回文化財の保存と修復に関する国際シンポジウム　63. 9

⑥ 保存科学　第５回大会研究発表をふりかえって

「日本文化財科学会会報」16　63. 7

山野　勝次(生物研究室)

① 防虫・防腐用語事典(編集委員長)　㈳日本しろあり対策協会　63. 5

① 家屋害虫(2)　日本家屋害虫学会　63. 7

② 微生物によるトンネルの被害とその対策　「トンネルと地下」19　63. 9

② 金属溶射被膜による防蟻処理(第１報)　―亜鉛溶射被膜で被覆された材料の耐蟻性について―　「家屋害虫」11　1. 3

② 有機塩素系・有機リン系・カーバメイト系およびピレスロイド系化合物11種の殺蟻効力について　「家屋害虫」11　1. 3

③ 暗黒の住者　―シロアリ研究の手引(6)―　「文化財の虫菌害」15　63. 9

③ ＜総説＞　シロアリの加害習性　「木材保存」15　1. 1

⑤ 文化財の虫害と対策(第10回文化財虫菌害保存対策研修会)

㈶文化財虫害研究所　63. 7

⑤ シロアリの生態に関する実務的知識(昭和63年度しろあり防除施工士資格第２次講習会)　㈳日本しろあり対策協会　63. 9

⑤ 図書館における書籍の虫・カビと保存の知識

(東北大学　付属図書館　総合研修会)　東北大学付属図書館　63. 10

⑤ シロアリに関する知識(昭和64年度しろあり防除施工士資格第１次講習会)

㈳日本しろあり対策協会　1. 1

⑤ 文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会

㈶文化財虫害研究所　1. 2

⑥ シロアリと国鉄　㈳日本しろあり対策協会創立30年誌　63. 11

⑥ 森八郎先生の御逝去を悼む　「文化財の虫菌害」16　63. 11

修復技術部

昭和62年度

樋口　清治(修復技術部長)

② 顔料彩色層(胡粉,黄土)の粉状剝離の防止処置について　「保存科学」26号　62. 3

中里　壽克(第1修復技術研究室長)

② 鑑胎櫛類の技法　『史跡寺地遺跡』　62. 7

② 天蓋の漆芸技法　『平等院大鑑』II　彫刻　62.10

③ 仙台伊達政宗墓所出土副葬品の保存処置　「保存科学」27号　63. 3

④ 漆芸品の修復　美術館・博物館の保存担当学芸員研修会　62. 8

④ 漆芸技法からみた三壇の製作順序　美術史学会東京支部例会　63. 1

増田　勝彦(第2修復技術研究室長)

② 〔報告〕絵画の局部クリーニングに対するサクションテーブルと超音波発信機の効果　「保存科学」27号　63. 3

③ Japanese Paper and Hyogu　「The Paper Conservation」9　62.12

④ 和紙とドーサ　第9回古文化財科学研究会大会　62. 5

⑤ 保存科学—諸記録媒体の劣化と保存処置　「文書館学」研究集会　62.11

⑤ 図書館・美術館の資料としての紙
第9回文化財(書籍古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会　62. 7

⑤ 表具の科学　美術館・博物館の保存担当学芸員研修　62. 8

⑤ 保存修復概論　美術館・博物館の保存担当学芸員研修　62. 8

⑤ 史料の保存科学　第33回近世史料取扱講習会　62.10

⑥ 〔資料〕紙本の漂白：その簡単な化学と作業工程(I)翻訳
「古文化財の科学」32号　62. 3

⑥ 「透かし文様　—主として17～18世紀—」共訳　雄松堂出版　62.12

⑥ 〔資料〕紙本の漂白：その簡単な化学と作業工程(II)翻訳
「古文化財の科学」33号　63. 3

青木　繁夫(第3修復技術研究室長)

② Conservation of Excavated Iron Objects in Japan
Recent Adovances in the Conservation and Analysis of Artifacts　62. 7

調査研究

② 三ヶ日町猪久保遺跡出土銅鐸の保存修復に関する研究 「保存科学」27号 63. 3

⑤ シランカップリング剤による鉄錆の安定化処理 ICCROM 62. 5

⑤ 金属文化財の保存修復 美術館・博物館の保存担当学芸員研修 63. 3

西浦 忠輝(主任研究官)

② 珪酸塩による石材の強化保存処置に関する実験的研究(李と共著)

「古文化財の科学」32号 62. 12

② 史跡・薬師堂石仏における凍結破壊の発生(三浦と共著)「保存科学」27号 63. 3

④ 珪酸カリウムによる石材の強化保存処置に関する実験的研究(李と共同)

第9回古文化財科学研究会大会 62. 5

④ 明治石造建築の保存 —旧日本郵船小樽支店— (増田, 村上と共同)

第4回日本文化財科学会大会 62. 6

④ Laboratory Evaluation of the Mixture of Silane and Organic Resins as Consolidant of Granularly Decayed Stone

8th Meeting of ICOM Committee for Conservation, Sydney 62. 9

④ Laboratory Test on the Colore Change of Stone by Impregnation with Silane 8th Meeting of ICOM Committee for Conservation, Sydney 62. 9

⑤ 石造文化財の劣化と保存, 修復処置

博物館・美術館等保存担当学芸員研修 62. 8

⑥ 第8回ＩＣＯＭ保存委員会大会報告(三浦と共著) 「保存科学」27号 63. 3

昭和63年度

伊原 恵司(修復技術部長)

② 古建築に用いられた木の種類と使用位置について —中世から近世への変化を中心として— 「保存科学」28号 1. 3

⑤ 日本建築について 日本建築セミナー 63. 4～1. 3

中里 壽克(第1修復技術研究室長)

② 須弥壇の漆芸技法 『平等院大鑑』I 建築 63. 8

② 春日大社古神宝類の漆芸技法的研究 『国華』1111, 1112, 1113 63. 3, 4, 5

④ 金工品の漆箔と焼付漆 文化財保存修復研究協議会 63. 12

増田 勝彦(第2修復技術研究室長)

② 楼蘭文書—残紙に関する調査報告

「楼蘭発現—残紙・木牘」日本書道教育会議編　63.10

③ 文化財修復と和紙　「和紙Q＆A」共同企画　63. 5

③ 楼蘭文書料紙と紙の歴史

「スウェン・ヘディン楼蘭発現残紙・木牘書法選」日本書道教育会議編　63.10

⑤ 図書館・美術館の資料としての紙

第10回文化財(書籍古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会　63. 7

⑤ 表具の科学　美術館・博物館の保存担当学芸員研修　63. 8

⑤ 保存修復概論　美術館・博物館の保存担当学芸員研修　63. 8

⑤ 保存科学　史料管理学研修会　63.10

⑤ 史料の修理<歴史資料>　歴史民俗資料館等専門職員研修会　63.11

⑤ 美術工芸品の材料および技法(紙)

昭和63年度指定文化財(美術工芸品)修理技術者講習会　63.11

青木　繁夫(第3修復技術研究室長)

② Conservation and Restoration of Archaeological Objects Excavated at the Azumazaka Tomb　The Conservation of Far Eastern Art　63.10

② 夜須町峯遺跡出土金属遺物の保存修復研究　「保存科学」28号　1. 3

⑤ 出土鉄製品の脱塩処理について　第10回古文化財科学研究会講演会大会　63. 5

⑤ 出土鉄製品の安定化処理　韓国文化財研究所　63. 6

⑤ 考古・民俗資料の修理　歴史民俗資料館等専門職員研修会　63.11

⑤ 日本の金属文化財保存と気候風土

ユネスコアジア地区保存セミナー(インド)　63.12

⑥ 考古学新発見の時代　公明新聞　63.10

西浦　忠輝(主任研究官)

② ＰＳ加固風化石雕的進一歩研究(李と共著)　「敦煌研究」16号　63. 8

② 敦煌壁画加固材料的選択試験(李と共著)　「敦煌研究」16号　63. 8

② 出土水浸木材の保存処置後の安定性〔第1報〕；環境湿度変化による寸法変化(1)(今津と共著)　「保存科学」28号　1. 3

④ 重文・幸橋の保存；特に石材の強化，防水処置について(橋本と共同)

調査研究

第10回古文化財科学研究会講演会大会　63. 5

④ Experimental Study on the Consolidation of Fragile Porous Stone with Potassium Silicate for the Conservation of Cave Temples in China(李と共同)　12th IIC Congress in Kyoto　63. 9

④ 敦煌莫高窟における環境条件測定調査について

東京国立文化財研究所　総合研究会　1. 2

⑤ 石造文化財の劣化と保存，修復処置

博物館，美術館等保存担当学芸員研修　63. 8

⑤ 敦煌石窟保存の歴史的進程<翻訳邦文監修>　「古文化財の科学」32号　63. 12

⑤ 石造文化財の劣化と保存，修復処置

埋蔵文化財発掘技術者専門研修「保存科学課程」　1. 2

情報資料部

昭和62年度

鶴田　武良(写真資料研究室長)

② 全国美術展覧会からみた中国現代絵画の動向

「現代中国美術秀作展」日中友好会館美術館　63. 1

② 来舶画人作品から見た清代花鳥画の一面　「美術研究」342　63. 3

③ 作家略歴(85名)　「現代中国美術秀作展」日中友好会館美術館　63. 1

③ 校刊「鉄斎書簡・附鉄翁宛書簡」　「美術研究」341　63. 2

④ 近代中国における西洋画の受容　美術部・情報資料部公開学術講座　62. 11

④ 中国現代絵画の研究と鑑賞の情況　中国研究所　62. 12

④ 上海派の成立　中国研究所　62. 12

④ 中華民国初期の美術教育　中国研究所　62. 12

④ 中西画の成立　中国研究所　63. 1

④ 広東の絵画運動　中国研究所　63. 1

④ 木刻運動　中国研究所　63. 1

④ ソビエト社会主義リアリズムの影響　中国研究所　63. 1

④ 業余美術運動　中国研究所　63. 2

④ 文革後の美術運動　中国研究所　63. 2

④ 台湾地区における美術運動　中国研究所　63. 2

⑤ 斉白石展　NHK教育TV　62. 4

⑥ 作品解説・年表(翻訳)　「中華民国現代十大美術家展」　62. 4

⑥ 試論・風俗画宋張択端筆清明上河図の芸術的特色と位置　上・中・下
「国華」1108, 1110, 1111　62.10～63.3

米倉　迪夫(文献資料研究室長)

② 信実と子孫たち(上)　「美術研究」342　63. 3

② 美術史研究における情報と電算機の利用　―情報の共有化をめぐって―
「MUSEUM」440　62.11

④ 情報の共有化について　美術史学会東部支部例会　62. 7

⑥ 保元平治合戦図屏風に見る武士の世界　保元平治合戦図　角川書店　62.11

島尾　新(文献資料研究室員)

② 検索システムと索引言語　―美術史学の立場から―
「美術研究と情報処理」日仏美術学会　62. 5

③ 「江天遠意図」等解説　「禅林画賛」毎日新聞社　62.10

③ 「夕顔棚納涼図」等解説　「メトロポリタン美術全集」別巻2　福武書店　62.12

④ モノクロームの絵画　―「水墨」の諸問題―　美術部・情報資料部研究会　62. 7

鈴木　廣之(写真資料研究室員)

③ 肖像画　―桃山時代―　日本絵画史図典　福武書店　62.10

③ 遍歴と伝説　日本の美術259　岩佐又兵衛　至文堂　62.12

③ 作品解説(日月山水図屏風他)　メトロポリタン美術全集別巻2　福武書店　62.12

④ 東洋美術における転換期の諸問題1　美術部・情報資料部研究会　62. 5

④ 桃山時代の肖像画　―「似ること」をめぐって―
国際交流美術史研究会第6回国際シンポジウム　62. 6

井手誠之輔(写真資料研究室員)

② 中峰明本における頂相制作　科学研究費「工房の美学」報告書　63. 3

③ 新九州仏教美術百選56　以亨得謙像(萬歳寺)　西日本新聞夕刊　62.10

昭和63年度

調査研究

鶴田　武良(情報資料部長)

② 張大千的京都留学生涯　「張大千学術論文集」 台湾・国立歴史博物館　63. 9

② 張大千的絵画生涯　「張大千学術論文集」 台湾・国立歴史博物館　63. 9

② 木刻と抗戦美術運動

「中国新興版画六十年の歩み」展　日中友好会館美術館　63. 10

② 鉄斎と蘇東坡　別冊「墨」10　1. 3

③ 文化・美術の項　「中国年鑑」1988年版　中国研究所　63. 5

④ 張大千的絵画生涯

「張大千先生九十紀念学術研討会」 台湾・国立歴史博物館　63. 5

④ 台湾における近代美術の展開　美術部・情報資料部研究会　1. 3

⑤ 1930年代中国の美術運動　日中友好会館美術館　63. 10

⑥ 中国新興木刻略述(翻訳)

「中国新興版画六十年の歩み」展　日中友好会館美術館　63. 10

米倉　迪夫(文献資料研究室長)

② 美術史データベースと検索辞書　―東京国立文化財研究所におけるひとつの試み―　「人文科学とデータベース」1　63. 6

④ Policy Considerations for International Data Exchange, International Conference on Japanese Art History : The State of the Field

University of California, Berkeley　1. 2

鈴木　廣之(主任研究官)

③ 遠塵斎加藤信清筆阿弥陀三尊像　「美術研究」343　1. 2

④ 桃山時代の肖像表現をめぐって　東京国立文化財研究所総合研究会　63. 4

④ 加藤信清筆阿弥陀三尊像　美術部・情報資料部研究会　63. 6

④ The Social Stativy of Paintert in Seveoteenth Centory Japan: The Examination of the Evidence on City Guides

International Conference on Japanese Art History : The State of the Field, University of California, Berkeley　1. 2

島尾　新(文献資料研究室員)

③ 「竹石白鶴図」等解説 「室町時代の屏風絵」展カタログ　東京国立博物館　1. 3

④ アメリカにおける美術史学の動向　美術部・情報資料部研究会　63. 11

④ Art Historical Applications for Computer Technology : Current Projects in Japan

International Conference on Japanese Art History : The State of the Field, University of California, Berkeley　1. 2

④ 画像処理によるデータ表現について

「美術史学研究支援画像処理モデルの開発」研究会　1. 3

井手誠之輔(写真資料研究室員)

② ひろがる仏教　「奈良仏教」新潮社　1. 3

② 中峰明本自賛像をめぐって　「美術研究」343　1. 3

③ 新九州仏教美術百選75　高峯・断崖・中峰像(聖福寺)　西日本新聞夕刊　63. 10

③ 新九州仏教美術百選76　見心来復像(萬歳寺)　西日本新聞夕刊　63. 11

④ 中峰明本自賛像をめぐって　美術部・情報資料部研究会　63. 5

④ 東京国立文化財研究所における画像処理専用パッケージソフトの開発

「美術史学研究支援画像処理モデルの開発」研究会　63. 10

④ 美術史研究用画像処理パッケージソフト

「美術史学研究支援画像処理モデルの開発」研究会　1. 3

Ⅳ. 事　　業

1. 出　　版

(1) 美術研究

昭和62年度，63年度は340号から344号までが下記の内容で刊行された。A４判，各号40頁，原色図版２，単色図版８。

美術研究　第340号(昭和62年11月)

鑑画会再考	佐藤　道信
八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起　附載二(研究資料)	宮　　次男
富岡美術館蔵法華経絵(二幅)(図版解説)	関口　正之

美術研究　第341号(昭和63年２月)

片倉家伝来陣羽織二領　上	神谷　栄子
校刊「鉄翁書簡・附鉄翁宛書簡」(研究資料)	鶴田　武良
石山寺多宝塔の快慶作本尊像(図版解説)	松島　　健

美術研究　第342号(昭和63年３月)

来舶画人作品から見た清代花鳥画の一面	鶴田　武良
信実の子孫たち(上)	米倉　迪夫
百武兼行小論　―「ピエトロ・ミッカ図」をめぐって―	三輪　英夫
西洋における中国美術研究	方　　聞 (松本守隆訳)

美術研究　第343号(平成元年２月)

螺髪宝冠阿弥陀如来像について	井上　一稔
中峰明本自画像をめぐって	井手誠之輔
遠塵斎加藤信清筆阿弥陀三尊像	鈴木　廣之

美術研究　第344号(平成元年３月)

水墨の変容　―フェノロサ・ビゲロー旧蔵二作を中心に―	佐藤　道信

出　　版

尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について(五)　関口　正之

鹿子木孟郎滞欧書簡(1)　山梨絵美子

(2)　日本美術年鑑

昭和61年版(昭和63年3月発行)

昭和60年の内容を持つB5版，263頁。

昭和60年美術界年史

美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(東洋古美術)

物故者

昭和62・63年版(平成元年3月発行)

昭和61年，62年の内容を持つ合本。B5版，337頁。

昭和61・62年美術界年史

美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(東洋古美術)

物故者

(3)　芸能の科学

古典芸能についての研究論文，調査報告，資料翻刻等を掲載している。62，63年度は所属研究員による論考集を刊行した。

芸能の科学16　芸能論考Ⅸ(昭和63年3月発行)

悔過会所用の〔大懺悔〕と〔三十二相〕　廣瀬　美都

ヌク地考――幸流と折りあう大鼓を中心に――　高桑いづみ

事　　業

ささらと芸能――篠を使用する風流踊を中心に――　中村　茂子

民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究(第二部)

――後継者養成と学校教育――　三隅　治雄

芸能の科学17　芸能論考X(平成元年3月発行)

伝統芸能の保存組織のあり方の研究

――東大寺修二会の伝承基盤――　佐藤　道子

伝統芸能の保存組織のあり方の研究

――民俗芸能保存会の事例を中心に――　中村　茂子

能楽における後継者養成の現状

――国立能楽堂三役研修の事例を中心に――　羽田　昶

道行の節付け小考――加賀掾と義太夫――　鎌倉　恵子

(4)　保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査，研究，受託研究報告等の論文報告および修復処置概報等を掲載している。昭和62年度には第27号，昭和63年度には第28号を発行した。

保存科学　第27号(昭和63年3月発行)

大歳御祖神社拝殿内柱の白化現象　見城　敏子

史跡・薬師堂石仏における凍結破壊の発生　三浦定俊・西浦忠輝

ネフェルタリ王妃墓の微生物について　新井　英夫

絵画の局部クリーニングに対するサクションテーブルと超音波発信機の効果

増田　勝彦

三ケ日町久保遺跡出土銅鐸の保存修復に関する研究(受託研究報告第59号)

青木　繁夫

仙台伊達政宗墓所出土副葬品の保存処置(受託研究報告第60号)　中里　寿克

昭和61年度　修復処置概報　修復技術部

第8回ＩＣＯＭ保存委員会大会報告　西浦忠輝・三浦定俊

保存科学　第28号(平成元年3月発行)

伝統的漆下地固めの技法と保存について　見城　敏子

出　　版

紙質類文化財の保存に関する微生物的研究(第8報)

—Foxing 部位の構成成分について—

新井英夫・根本ちひろ・松井紀恵・松村典孝・村北宏之

表面電離型固体質量分析計 VG Sector の規格化について　平尾良光・馬淵久夫

古建築に用いられた木の種類と使用位置について　伊原　惠司

—中世から近世への変化を中心として—

出土水浸木材の保存処理後の安定性〔第1報〕　西浦忠輝・今津節生

—環境湿度変化による寸法変化(1)—

夜須町峯遺跡出土金属遺物の保存修復研究(受託研究報告　第61号)

青木繁夫・平尾良光

埼玉県指定文化財　天海坐像の修復処置(受託研究報告　第62号)

岡部昌子・樋口清治・増田勝彦

昭和62年度　修復処置概報　修復技術部

(5) 国際研究集会プロシーディングス

昭和62年度

The 10th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property —Masked Performances in Asia— (1987)

「アジアにおける仮面の芸能」を主題として行われた第10回国際研究集会(61. 9. 30～10. 2, 芸能部担当)のプロシーディングス(英文)を62年度に刊行した。集会では，日本を含むアジアに広く分布する仮面劇・仮面舞踊を取り上げ，個別的な変遷・構造や相互の交流などの問題が扱われた。本プロシーディングスには，発表論文，総合討議などが含まれている。おもな内容は，下記のとおりである。

HONDA Yasuji : Masked Performance Studies —Their Present State and Future Issues—

HOFF, Frank : Masked Drama East and West

SATO Michiko : A Study of *Oni* in Masked Performances at Japanese Buddhist Ceremonial Occasions

JOSHI, Tulashi Diwasa : The Living Tradition of the Astamatrika Dance-

Drama in the Kathmandu Valley, Nepal

HAGA Hideo : An *Oni* —A Leading Character of a Masked Observance—

TAKAYAMA Sigeru : Masked Festival and Folklore in Ladak —With the Masked Dances of the Hemis Monastery as the Center of Discussion—

TANABE Saburosuke : Various Aspects of Demon Masks and Their Development as *Nô* Masks

YAMAMOTO Hiroko : The Functions of *Shishi-mai* in Miharu, Japan

PARK Mira : A Comparative Study of Lion Dances in Japan and Korea —The Urayama *Shishi-mai* and the Pukchong *Sazamu*—

MIYAO Jiryo : The Lion Dance in China —A Comparison of the Northern and Southern Customs—

OOHASHI Tsutomu : *Shishi* and *Barong* —A Humanbiological Approach on Trance-Inducing Animal Masks in Asia—

HATA Hisashi : Use of the Mask in *Nô* and *Kyôgen*

MONTRISART, Chaturong : Distinctive Characteristics of Masked Dance-Drama in Thailand —Focusing on Roles and Performance—

LUOSANGDUOJI : An Essay on *Ba* —A Tibetan Masked Drama—

LEE Duhyun : The Folkloristic Background of Korean Masked Dance-Drama

BANDEM, I Made : *Topeng* in Contemporary Bali

OVERALL DISCUSSION

昭和63年度

The 11th International Symposium on the Conservation and Restoration of Curtural Property-Periods of Transition in East Asian Art-(1988)

「東アジア美術における転換期の諸問題」を主題とした美術部・情報資料部担当の国際研究集会（62. 10. 27～29）のプロシーディングス（和・英文）を刊行した。今回は，東アジア美術史のなかで生じた様々なジャンル・レヴェルでの変化を「転換期」という概念のもとに追求した。本プロシーディングスには，発表論文，総合討議などが含まれる。内容は下記のとおりである。

日本美術史の転換期の問題について—古代より中世へ—　　濱田　隆

平安時代末期の仏画に関する問題点　関口　正之
Nobuzane and Gotoba In　Maribeth GRAYBILL
牧谿筆「観音猿鶴図」の祖型について　小川　裕充
Chao Meng-fu: Tradition ane Self in the Early Yuan　John HAY
Zen Painting and Calligraphy in the Transition
to the Early Edo Period　Stephen ADDISS
仏師の動向—江戸から明治へ—　佐藤　昭夫
江戸から明治にかけての絵画的表現　坂本　満
金碧画の形成—室町前期和様絵画の動向—　吉田　友之
室町時代の詩画軸型式水墨山水画の諸商題，とくに言語介入を
伴う観画経験の二例として　清水　義明
小栗宗湛から狩野正信へ　河合　正朝
狩野派の成立—社会的存在としての—　辻　惟雄
Stylistic Changes in Buddhist Sculpture in Early Unified Silla
KANG Woo-bang
奈良時代後半から平安時代初期への転換期の諸問題
—木彫の成立に関して—　紺野　敏文
浄土宗成立期における彫刻界の動向　三宅　久雄
Open Discussion
Directory of Participants and Organizational Persons

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作の多くを所蔵している本研究所は，黒田清輝の功績を記念し併せて地方文化の振興に資するために，昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年1回地方において開催してきた。

昭和62年度，昭和63年度は，次のとおり開催された。

昭和62年度

会　場　北九州市立美術館

会　期　昭和62年8月1日(土)～8月30日(日)

事　　業

主　　催　東京国立文化財研究所・北九州市立美術館

開催日数　27日

入場者数　36,317人

陳列点数　油彩・パステル58点，木炭デッサン50点，写生帖17冊，書簡３点，日記５冊，参考資料若干

図　　録　Ａ４判変型，128頁，原色図版24頁，単色図版73頁

昭和63年度

会　　場　福島県立美術館

会　　期　昭和63年８月27日(土)～10月２日(日)

主　　催　東京国立文化財研究所・福島県立美術館

開催日数　31日

入場者数　12,531人

陳列点数　油彩・パステル58点，木炭デッサン50点，写生帖17冊，書簡３点，日記５冊，参考資料若干

図　　録　Ａ４判変型，128頁，原色図版24頁，単色図版73頁

3.　公開学術講座

美術部・情報資料部(第21回)

日　時　昭和62年11月14日(土)　13：30～16：30

会　場　日本経済新聞社小ホール(９階)

講　演　(1)　明治洋画と歴史画　　美術部第二研究室長　三輪　英夫

(2)　近代中国における西洋画の受容　　情報資料部長　鶴田　武良

美術部・情報資料部(第22回)

日　時　昭和63年12月10日(土)　13：30～16：30

会　場　日本経済新聞社小ホール(９階)

講　演　(1)　十一面観音像の表現について　　美術部第一研究室　井上　一稔

(2)　室町・桃山時代の陣羽織と鎧下着　　美術部主任研究官　神谷　栄子

芸能部(第18回)

日　時　昭和62年12月9日(水) 18：00～20：30

会　場　台東区立旧東京音楽学校奏楽堂

テーマ　民謡の技法――日本人の一生と歌――

講　演　(1) 祝い歌の類型　仲井幸二郎

(2) 歌の人生　三隅　治雄

実　演　(東京) 小桜保存えちごや会

(千葉) 印西町武西民謡保存会

(奄美) 田春茂春・田春ハル子

芸能部(第19回)

日　時　昭和63年12月7日(水) 18：00～20：30

会　場　台東区立旧東京音楽学校奏楽堂

テーマ　能の囃子　その技法

講　演　(1) 囃子の役割　羽田　昶

(2) 大鼓と小鼓の折合い　高桑いづみ

(3) 技法の種々相　高桑いづみ

実　演　大鼓　亀井忠雄　守家紀之

小鼓　宮増純三　三須信吾

笛　松田弘之

謡　藤波重満

4. 夏期学術講座

芸　能　部

芸能部においては，芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として，例年夏期4日間にわたる学術講座を，都内各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし，芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずるかたちをとる。

62年度は「日本音楽研究の視点」というテーマを設け，蒲生郷昭が担当し，7月6日

から9日までの4日間にわたり実施した。受講者は東京芸術大学，早稲田大学，慶応義塾大学，国立音楽大学，武蔵野音楽大学の各大学院生で，受講者数は9名。日程及びテーマ細目は下記のとおりである。

7月6日(月)

日本音楽における用語・用字の問題

「唄(うた)」字について　—1—

「唄(うた)」字について　—2—

7月7日(火)

現行真言声明の記譜法と唱法

多声部からなる音楽の構造の全体的把握について　—1—

多声部からなる音楽の構造の全体的把握について　—2—　道成寺の場合

7月8日(水)

美術作品に描かれた楽器　—1—　概観と研究史

美術作品に描かれた楽器　—2—　三味線

美術作品に描かれた楽器　—3—　三味線(つづき)

7月9日(木)

美術作品に描かれた楽器　—4—　三味線(つづき)

美術作品に描かれた楽器　—5—　その他の楽器—

演歌歌唱法の二，三の側面について　森進一とメログラフ

63年度は，「顕密法会論」のテーマで佐藤道子が担当し，7月4日から8日までの(6日を除く)4日間にわたり実施した。受講者は東京芸術大学，早稲田大学，慶応義塾大学，国学院大学，明治大学，仏教大学の各大学院生16名と国文学研究資料館の助教授2名の計18名。日程及びテーマ細目は下記のとおりである。

7月4日(月)

修業法と典礼・仏会

上代の僧尼修業

仏会の展開　—1—

7月5日(火)

仏会の展開　—2—　懺悔—悔過会—修正会

仏会の展開　—3—　読経—読経会—祈禱会

仏会の展開　—4—　講讃—論義会—供養会

7 月 7 日(木)

法華経と仏会　—1—　法華八講

法華経と仏会　—2—　法華懺法

顕と密の法要

7 月 8 日(金)

四種法

修法と仏会

補足，質疑

5.　博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

近年，地方においては博物館・美術館などの数が増加すると共にその施設が近代化し，燻蒸室，保存科学室，修復室などの保存に関する部門や施設設備が整備されて，学芸員のうちから，これら保存部門を担当する職員が配備されてきている。しかし，これらの職員が保存科学，技術の知識を習得しようとしても適切な学習の場や教材がないのが実状である。そのため博物館・美術館などの学芸員で保存を担当するものに対して，文化財の科学的保存に関する基礎的な知識および技術について研修を行い，その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし研修会を開催した。受講者数62年度14名，63年度15名。日程および研修題目・講師は下記のとおりであった。

昭和62年度

8 月 17 日(月)

オリエンテーション

文化財と環境　　所　長　濱田　隆

保存科学概論　　保存科学部長　馬淵　久夫

8 月 18 日(火)

科学写真　　保存科学部主任研究官　石川　陸郎

保存科学部主任研究官　三浦　定俊

文化財修復概論　　第二修復研究室長　増田　勝彦

事　業		
	修復技術部長	樋口　清治
文化財の有機化学　―漆と膠―	物理研究室長	見城　敏子
8 月 19 日(水)		
温 湿 度		三浦　定俊
展示環境 1　環境と劣化	保存科学部主任研究官	門倉　武夫
見　学		門倉　武夫
8 月 20 日(木)		
文化財の彩色		見城　敏子
文化財の生物劣化	生物研究室長	新井　英夫
実　習　―生　物―		新井　英夫
8 月 21 日(金)		
実　習　―温湿度機器の補正―		三浦　定俊
博物館・美術館の展示照明光源		石川　陸郎
実　習　―光源の取扱い―		石川　陸郎
8 月 22 日(土)		
金属文化財の修復	修復技術部主任研究官	青木　繁夫
8 月 24 日(月)		
実　習　―燻　蒸―		新井　英夫
実　習　―環　境―		新井　英夫
		見城　敏子
展示環境 2　劣化とその因子		見城　敏子
8 月 25 日(火)		
文化財の分析化学		平尾　良光
実　習　―紫外線の応用―		石川　陸郎
実　習　―紫外線の応用―		石川　陸郎
8 月 26 日(水)		
実　習　―X　線―		石川　陸郎
		三浦　定俊
自由研修		

8 月 27 日(木)

漆芸品の修復	第一修復研究室長	中里　壽克
表　具		増田　勝彦
実　習　—表　具—		増田　勝彦

8 月 28 日(金)

石造文化財の劣化と保存・修復処置	修復技術部主任研究官	西浦　忠輝
文化財の修復と合成樹脂		樋口　清治
実　習　—剝落止め—		樋口　清治

8 月 29 日(土)

レポート作成・修了式

昭和63年度

8 月 15 日(月)

開会式・オリエンテーション

文化財と環境	所　長	濱田　隆
保存科学概論	保存科学部長	馬淵　久夫

8 月 16 日(火)

文化財の分析化学	化学研究室長	平尾　良光
保存修復概論	修復技術部長	伊原　惠司
	第二修復研究室長	増田　勝彦
文化財の有機化学	物理研究室長	見城　敏子

8 月 17 日(水)

漆芸品の修復	第一修復研究室長	中里　壽克
文化財の修復と合成樹脂	名誉研究員	樋口　清治
実　習　—合成樹脂—		樋口　清治

8 月 18 日(木)

彩色材料		見城　敏子
文化財の生物劣化	生物研究室長	新井　英夫
実　習　—虫黴害と対策—		新井　英夫

8 月 19 日(金)

事　業

温湿度の計測	保存科学部主任研究官	三浦　定俊
石造文化財の修復	修復技術部主任研究官	西浦　忠輝
文化財の照明	保存科学部主任研究官	石川　陸郎

8 月 20 日(土)

実　　習　—光源の取り扱い—		石川　陸郎

8 月 22 日(月)

実　習　—燻　蒸—		新井　英夫
実　習　—環　境—		見城　敏子
		新井　英夫
展示環境Ⅱ		見城　敏子

8 月 23 日(火)

金属文化財の修復	第三修復技術研究室長	青木　繁夫
表具の科学		増田　勝彦
実　習　—表　具—		増田　勝彦

8 月 24 日(水)

実　　習　—温湿度機器の補正—		三浦　定俊

8 月 25 日(木)

科学写真の文化財への応用		石川　陸郎
		三浦　定俊
展示環境Ⅰ	保存科学部主任研究官	門倉　武夫
施設見学　—東京国立博物館の資料館・法隆寺館の環境コントロール室—		門倉　武夫

8 月 26 日(金)

実　習　—科学写真Ⅰ—		石川　陸郎
		三浦　定俊
実　習　—科学写真Ⅱ—		石川　陸郎
実　習　—科学写真Ⅲ—		石川　陸郎

8 月 27 日(土)

レポート作成・修了式

6. 会　議

文化財の保存および修復に関する研究のための国際研究集会

昭和62年度

昭和52年度より毎年開催している本年度の集会（第11回）は，「東アジア美術における転換期の諸問題」をテーマとして美術部・情報資料部の担当で開催した。113名の参加者を得て，美術史における転換期の定義・歴史的意味などについて活発な討論がなされた。発表者は海外5名，国内10名で，発表は4セッションにわけて行われた。日程および発表題目は以下のとおりである。

名　称　The 11 th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property
—Periods of Transition in East Asian Art—

日　時　昭和62年10月27日～29日

場　所　東京国立博物館大講堂

（題名および発表者）

10 月 27 日（火）

【基調報告】

1. Problems of the Ancient to Medieval Transitional Period in Japanese Art History（日本美術史における転換期の問題について　—古代より中世へ—）
東京国立文化財研究所　濱田　隆

【セッション1】

1. Problems in Buddhist Painting of the Late Heian Period（平安時代末期の仏画に関する問題点）　東京国立文化財研究所　関口　正之
2. Nobuzane and Gotoba In（信実と後鳥羽院）
カリフォルニア大学　M・グレービル
3. Muqi's Use of Chinese Models in the "Kannon, Monkey and Crane Triptych"（牧谿筆「観音猿鶴図」の祖型について）　東京大学　小川　裕充
4. Chao Meng-fu : Tradition and Self in the Early Yuan（趙孟頫—元初における伝統と自我）　ニューヨーク大学　J・ヘイ

事　　業

10 月 28 日(水)

【セッション2】

1. Zen Painting and Calligraphy in the Transition to the Early Edo Period (江戸時代初期への移行期における禅の書画)　カンサス大学　S・アディス
2. Buddhist Sculptors of the Transitional Phase from the Late Edo to Meiji Periods (仏師の動向—江戸から明治へ) 東京国立博物館　佐藤　昭夫
3. Pictorial Representation of the Late Edo to Meiji (江戸から明治にかけての絵画表現について)　お茶の水女子大学　坂本　満

【セッション3】

1. Trends in Early Muromachi Period Japanese-style (Wayô) Painting and Their Role in the Evolution of Kinpekiga ("Gold-and-blue Painting") (金碧画の形成—室町前期和様絵画の動向)　帝塚山学院大学　吉田　友之
2. Some Problems of Shigajiku-type Ink Landscape Painting: Picture-viewing through Written Words, ca. 1400-1480 (応永—文安期の詩画軸型式水墨画の諸問題—とくに言語介入を伴う観画経験の一例として)　プリンストン大学　清水　義明
3. From Oguri Sôtan to Kano Masanobu (小栗宗湛から狩野正信へ)　慶応義塾大学　河合　正朝
4. The Social Context of the Establishment of the Kano School (狩野派の成立—社会的存在としての)　東京大学　辻　惟雄

10 月 29 日(木)

【セッション4】

1. Stylistic Changes in Buddhist Sculpture of the Early Unified Silla Period (統一新羅初期の様式的変化)　国立中央博物館　姜　友邦
2. Problems in the Transition from Nara to Heian Sculpture: The Beginnings of Wood Sculpture (奈良時代後半から平安時代初期への転換期の諸問題—木彫の成立に関して)　慶応義塾大学　紺野　敏文
3. Trends in Sculpture at the Time of the Establishment of the Pure Land Sects (浄土宗成立期における彫刻界の動向) 東京国立文化財研究所　三宅　久雄

昭和63年度

昭和63年度は保存科学部が担当した。主題はリモートセンシングという立場から設定した。この分野は近年話題が多くなってきており，画像処理，非接触法による絵画の研究，コンピュータによる記録の処理法などそれぞれの話題について，各国の研究者との意見の交換，討議を行った。参加者約100名。

名　称　The 12th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property—Analysis and Examination of an Art Object by Imaging Technique—

日　時　昭和63年9月29日～10月1日

場　所　社会教育研修所

(題名および発表者)

9月29日(木)

【基調報告】

1. Digitization of Works of Art —Study and Conservation of Scientific Images—（美術品のディジタル処理　—画像の研究と保存—）

フランス博物館群研究所　Ch. ラーニエ

2. Application of IR Reflectography and Emissiography to Art Historical Research —Focusing on Recent Studies of the Paintings at the Kakurin-ji and Byodo-in Temples—（美術史的研究に対する赤外線テレビおよびエミシオグラフィーの適用　—鶴林寺太子堂柱絵と平等院鳳凰堂壁扉画の調査を中心に—）

学習院大学　秋山　光和

【セッション1】

1. The Study of Drawings in the Near Infrared（近赤外線を利用した絵画の研究）

バイエルン州立美術館　A. バーメスター

2. Use of Near Infrared Radiation in Examination of Paintings（絵画調査における近赤外線の利用）

ミラノ大学　M. ミラッツオ

9月30日(金)

【セッション2】

1. Image Processing of X-ray Photographs by One-dimensional Analog

事　　業

Spatial Differential Treatment（一次元アナログ空間微分処理によるX線画像の鮮明化）　東京国立文化財研究所　三浦　定俊

2. Development of Chemical Analyzers for Historical Materials（歴史試料用化学分析装置の開発）　国立歴史民俗博物館　田口　勇

【セッション3】

1. The Multi Media Database at National Museum of Ethnology（国立民族学博物館におけるマルチメディアデータベース）国立民族学博物館　杉田　繁治

2. Electronic Cataloging and Browsing of Ethnographic Samples（民族学標本の電子カタログ化と概覧）　日本アイ・ビー・エム　洪　政国

3. Automatic Replication and Recording of Museum Artifacts（博物館収蔵品の複製と記録作成の自動化）　カナダ国立研究機構　P. ブーランジェ

10 月 1 日(土)

【セッション4】

1. Interactive Design Analysis: System Overview（美術品の形状解析システム）　スミソニアン研究機構　L. ファン・ツェルスト

保存科学部・修復技術部

第16回文化財保存修復研究協議会

日　時　昭和62年11月25日

場　所　東京国立文化財研究所別館会議室

主　題　文化財保存・修復のための調査について

年月を経た文化財は傷んでいる場合が多く，保存・修復処置の必要な場合が多い。このために文化財の劣化状況あるいは現状を正確に理解しておく必要がある。現状把握のための調査はどうあるべきか，また調査法はどのように改善されてきたかについて協議し，今後の調査のあるべき方向について検討した。

（講演題目および発表者）

(1) 木簡の調査

文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官　狩野　久

(2) 文化財建造物の修理に伴う諸調査について

会　　議

文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官　天田　起雄

(3)　考古資料の修復における調査の問題

東京国立文化財研究所修復技術部主任研究官　青木　繁夫

(4)　文化財に使用されている紙の調査

東京国立文化財研究所修復技術部第二修復技術研究室長　増田　勝彦

(5)　彫刻調査の問題点について　武蔵野美術大学教授　田辺三郎助

(6)　白杵石仏の保存対策　東京国立博物館学芸部企画課長　鷲塚　泰光

第17回文化財保存修復研究協議会

日　時　昭和63年12月8日(木)　10：00～17：00

会　場　東京国立文化財研究所別館会議室

主　題　装飾金工品の保存における問題について

金属工芸は，装飾に関わる分野で古くから広く応用されてきた。その製作には職人的な技術が今もって要求され，それが復元，修理，保存等に微妙な影響を与えている。装飾金工品の保存修復に科学的調査研究が，どのように関与できるのかが討議された。

（講演題目及び発表者）

(1)　装飾金工品について　日本美術刀剣保存協会専務理事　鈴木　友也

(2)　刀装金具と甲冑金具について　選定保存技術保持者　宮島　市郎

(3)　建築飾金具について　森本餝金具製作所社長　森本安之助

(4)　古墳時代金銅製品の保存について

東京国立文化財研究所修復技術部第三修復技術研究室長　青木　繁夫

(5)　鍍金の分析調査について

東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室長　平尾　良光

(6)　金工品の漆箔と焼付漆

東京国立文化財研究所修復技術部第一修復技術研究室長　中里　壽克

(7)　総合討議

7. 国際・国内交流

(1) 職員の国際交流

所　長

1. 濱田所長は，昭和62年９月26日から10月18日までアメリカ情報庁の招へいによりスミソニアン研究所等を訪問し，日米国立博物館交流の推進を図るため，博物館等関係者と協議した。

美　術　部

1. 山梨絵美子は，「パリにおける日本―ヨーロッパ絵画との出会い」展の作品運搬随伴および展示指導のため，昭和62年９月21日から10月10日まで，アメリカに赴いた。
2. 佐藤道信は，海外流出近代日本美術作品調査のため，昭和62年11月８日から12月３日まで，アメリカ，フランス等で調査を行った。
3. 三輪英夫は，久米桂一郎関係資料等の調査のため，昭和63年10月18日から28日まで，フランスで関係資料の調査・収集を行った。
4. 佐藤道信は，在外日本美術作品の調査研究のため，情報資料部研究員３名とともに，昭和63年12月10日から12月19日まで，アメリカで調査を行った。
5. 三宅久雄は，平成元年２月14日から２月18日まで，山梨絵美子は同２月15日から２月26日まで，ＣＡＡ(米国美術史学会)出席のためアメリカに赴きり，同学会で発表した。
6. 三宅久雄は，文部省在外研究員として，平成元年３月１日から12月31日まで，中国，イギリス，フランス，西ドイツ，イタリア，アメリカにおいて，調査研究を行った。

芸　能　部

1. 佐藤道子は，カナダのトロント大学Ｒ．Ｅ．Ｅ．Ｄ．(初期イギリス演劇記録保存所)の招きにより，昭和62年９月28日から10月27日までトロント大学に滞在し，日本とヨーロッパにおける中世演劇の成立過程に関する意見交換を行った。また，その間

にカナダにおける宗教典礼の現状調査とともに，宗教意識や典礼についての質疑も行った。

保存科学部

1. 三浦定俊は，昭和62年9月3日から9月16日までオーストラリア，シドニーで開かれた第8回国際博物館会議（ＩＣＯＭ）保存科学部会に出席し，鶴林寺太子堂の柱絵調査および，中尊寺金色堂の保存環境に関する研究発表を行った。
2. 見城敏子と新井英夫は，昭和62年9月4日から9月29日までオーストラリア，インドネシアを訪問し，シドニーで開かれた第8回国際博物館会議（ＩＣＯＭ）保存科学部会に出席し，見城は「日本の伝統的木造建造物における光モニターによる日光の影響の研究」新井は「フォクシング要因糸状菌について」の研究を発表した。その後，インドネシア教育文化省遺跡・建造物課を訪れ，ボロブドール遺跡保存事務所で文化財保存に関する研究発表および意見交換を行い，研究交流を促進した。
3. 馬淵久夫は，昭和63年3月30日から昭和63年4月5日までアメリカ，ワシントンのスミソニアン研究機構を訪問し，共同研究の進め方について予備的な打ち合せを行った。
4. 新井英夫は，昭和63年6月9日から6月19日まで中華人民共和国文化部の招へいを受け，北京の文物保護科学技術研究所で，文化財保存科学における生物学的研究と加害生物防除法の実際について講演し，その後詳細にわたって中国の専門家と討論し，研究交流を行った。
5. 石川陸郎は，昭和63年10月3日から12月27日まで文部省在外研究員としてヨーロッパ，アメリカにおける美術館・博物館の展示環境を調査し，担当専門官と意見交換を行った。
6. 馬淵久夫，平尾良光，三浦定俊は，平成元年1月19日から1月28日までアメリカスミソニアン研究機構を訪問し，担当の研究者と日米共同研究の在り方を討議した。
7. 見城敏子は平成元年3月10日から3月28日まで中国・蘭州大学の招へいにより，漆工技法，文化財の彩色技法および材質劣化について講演し，中国の研究者と意見交換した。

事　業

修復技術部

1. 西浦忠輝は，昭和62年9月3日から9月16日までオーストラリア，シドニーで開かれた第8回国際博物館会議（ICOM）保存科学部会に出席し，「粒状に劣化した石の強化剤としてのシランと有機樹脂との混合物の評価実験」および「シラン含浸処理による石の変色に関する実験的研究」の2つの研究発表を行った。
2. 増田勝彦は，昭和62年10月25日から11月18日までイタリアに出張し，ICCROMにおける「紙製文化財保存研修」のうち「東洋の紙製文化財の日本修復技術」講師を勤めた。また，ヴィテルボ市文化財保存修復センターの職員に対して修復技術研修を行った。
3. 青木繁夫は，昭和62年12月4日から12月15日までユネスコとインド政府主催のアジア地区の文化財保存セミナーに参加した。インド国立文化財研究所を会場として，パキスタン，タイ，ビルマなど8ケ国から約40名の参加者があった。「日本における金属文化財の保存と気候風土」というテーマで発表を行った。
4. 伊原惠司は，昭和63年6月18日から6月25日まで台湾行政院文化建設委員会主催の「第三次古蹟保護技術研討会」に参加した。標記の会議の講師として出席するとともに，台北～高雄地区に所在する古建築の修復状況の視察と技術研究を行った。研討会では「日本に於ける歴史的建造物の保存と修復技術」と題して(1)日本の文化財建造物保存の歴史，(2)保存修復の理念，(3)保存修復の実際，(4)保存修復技術と材料等について報告を行った。

情報資料部

1. 鶴田武良は，昭和62年11月5日から13日まで中華人民共和国北京の中国美術館において現代中国絵画の調査を行った。また，同年11月17日から12月1日まで中華民国台北で行われた文化資産保存会議に出席するとともに台北・台南で現代中国絵画の調査を行った。
2. 島尾　新は，文部省在外研究員として，昭和63年1月10日から11月9日まで，米国および欧州で室町水墨画の調査研究を行った。
3. 鶴田武良は，昭和63年5月13日から28日まで，台湾国立歴史博物館(台北)で行われた張大千生誕90年記念研究会に出席し，同時に現代中国絵画の調査を行った。

4. 米倉迪夫・鈴木廣之・島尾　新は，昭和63年12月5日から19日まで，ニューヨーク・ワシントンなど米国六都市で在外日本美術作品の調査研究のための予備調査を行った。

5. 米倉迪夫・鈴木廣之・島尾　新は，昭和63年2月16日から18日まで米国サンフランシスコで開催された，ＣＡＡ(米国美術史学会)全国大会に出席し，つづいて19と，20日，カリフォルニア大学バークレー校主催，当研究所共催の美術史学の現状に関する国際会議（International Conference on Japanese Art History: The State of the Field）に出席，研究発表を行った。米倉・島尾・井手誠之輔は，ひきつづき2月21日から3月5日まで，ニューヨーク，メトロポリタン美術館において，同館蔵絵画のデータベース化についての協議・予備調査を行った。また，井手はワシントンにおいてスミソニアン研究機構との研究協力についての協議を行った。

(2) 海外研究者の来訪

昭和62年4月1日～昭和63年3月31日

年　月　日	国　　名	所　　属　・　氏　　名
62. 4. 9	韓　　国	国立現代美術館 李　　仁　範
5.20	台　　湾	故宮博物院器物所所長 張　　臨　生
6.30	韓　　国	韓国文化文報室長 金　　東　虎
7.30	台　　湾	台北市立美術館長 黄　　光　男
8.31	米　　国	ニューヨーク建造物保存専門家 メリーB．ディエリックス
9. 9	米　　国	アメリカ文化情報局長 ジャック・シェレンバーガー
63. 2. 6	英　　国	大英博物館保存科学研究室長 スーザン・ブラッドレイ
2.17	米　　国	スミソニアンサックラー美術館長 マイロビーチ
2.25	イ　タ　リ　ア	イクロム所長 セバット・エルダー
4.11	米　　国	スミソニアン研究機構 ジェフレイ・スターン
5.13	中　　国	チベット自治区訪日団 丹　　増　団長　他5名
5.17	米　　国	スミソニアン研究機構長官 ロバート・マコーミック・アダムス
6. 7	中　　国	陝西省文物事業管理局代表団 張　　廷　皓　団長　他3名
6.16	米　　国	ハーバード大学 ローゼン・フィールド
7.12	中　　国	中国歴史博物館 李　　先　登　他3名
7.25	中　　国	中国景徳鎮歴史名城建設・古建築保存技術交流訪日団　黄　浩　団長　他5名

年 月 日	国 名	所 属 ・ 氏 名
63. 8.22	台 湾	中華民国文化資産維護学会赴日考察団 劉 萬 航 他14名
9. 3	米 国	ミシガン大学 ブルース・スミス
〃	中 国	中国社会科学院歴史研究所 李 学 勤 団長 他4名
9. 7	英 国	大英博物館保存部長 ウィリアム・アンドリュー・オディー
12.12	韓 国	韓国文化財管理担当官研修団 リークッンホ団長 他17名
1. 3. 7	ベトナム	ベトナム文化大臣 チャン・ヴァン・ファク
3.10	中 国	中国市政工程西北設計院（甘粛省建築学会常務理事） 鄧 延 复
〃	中 国	敦煌研究院副院長 赵 友 賢 敦煌研究院美術部研究院 関 友 惠
3.16	中 国	中国文化部訪日団 游 琪 団長 他4名

(3) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員制度が設けられ，62年度は国外5名，国内3名，63年度は国外10名，国内3名の研究員を招へいし，下記のように共同研究が行われた。

昭和62年度

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
マリベス・グレイビル	米 国	カリフォルニア大学助教授	62.10.11 ～62.11.23	中世大和絵研究及び東洋美術文献データベース（欧文文献）の研究	情報資料部文献資料研究室 米倉 室長

事業

氏　名	国　籍	役　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
スーザン・ブラッドレー	英　国	大英博物館保存科学研究室長	63. 1. 17 ～63. 2. 6	酸化エチレン法による金属文化財の安定化処理法の研究	修復技術部 樋口　部長
ヨコヤマ　ユウジ	フランス	フランス国立科学センター主任研究員	63. 3. 2 ～63. 3. 25	文化財の非破壊検査法の研究	保存科学部 馬淵　部長
バーバラ・ピエト・ボガーズ	西　独	西独東亜美術館修復担当員	63. 3. 1 ～63. 3. 30	工芸品修復理念の東西比較研究	修復技術部 第一修復技術研究室 中里　室長
アン・ニシムラ・モース	米　国	ボストン美術館東洋部学芸助手	63. 2. 23 ～63. 3. 14	鎌倉時代仏教絵画の研究	情報資料部 文献資料研究室 米倉　室長

氏　名	役　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
宮崎　法子	三重大学 人文学部助教授	63. 2. 23 ～63. 3. 23	中国宋代仏教絵画史の研究	美術館 関口　部長
須藤　弘敏	弘前大学 人文学部助教授	63. 2. 29 ～63. 3. 20	美術史研究におけるコンピューターの利用	情報資料部 文献資料研究室 米倉　室長
河田　昌之	和泉市久保惣記念美術館 学芸員	63. 2. 15 ～63. 3. 5	清朝美術，とくに清末美術の総合的研究	情報資料部 写真資料研究室 鶴田　室長

昭和63年度

氏　名	国　籍	役　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
段　文　傑	中　国	敦煌研究院長	63. 5. 1 ～63. 5. 30	中国と日本の文化財保存修復事業について協議	
L. ファン・ツェルスト	米　国	スミソニアン研究機構保存分析研究所長	63. 9. 13 ～63. 10. 3	美術品調査への画像処理技術の応用	保存科学部 馬淵部長
Ch. ラーニエ	フランス	フランス博物館群研究所長	63. 9. 17 ～63. 10. 3	〃	〃

氏　　名	国　籍	役　　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
王　丹　華	中　国	中国文物保護科学技術研究所副所長	63. 9.25 ～63.10. 2	文化財の保存修復に関する調査研究	修復技術部 伊原部長
周　宝　中	中　国	中国歴史博物館保管部主任	〃	〃	〃
ジリ・スラメク	チェコスロバキア	チェコ国立文化財修復研究所研究部長	63. 9.18 ～63.11.18	石造建造物の保存を目的とした石材の化学処置	修復技術部 西浦主任研究官
サミュエル・C・モース	米　国	アーモスト大学助教授	1. 1.10 ～1. 1.23	鎌倉時代初期彫刻の研究	美術部第一研究室三宅室長
マーガット・ヘイ	イタリア	イタリア書籍病理研究所非常勤研究員	1. 2.17 ～1. 3. 1	紙の漂白	修復技術部 第二修復技術研究室増田室長
呉　歩　乃	中　国	中国美術家協会編審	1. 3.16 ～1. 3.30	一八芸社を中心とする木刻運動	情報資料部 鶴田部長
デビット・スコット	米　国	ゲッティ保存研究所部長	1. 3.21 ～1. 3.30	金属遺物の調査と保存修復	修復技術部 第三修復技術研究室青木室長

昭和６３年度 国内招へい研究員

氏　　名	役　　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
脇田 久伸	福岡大学理学部教授	63. 11. 14 ～63. 12. 28	出土鉄製品の錆の研究	修復技術部 第三修復技術研究室 青木 室長
鹿谷 勲	奈良県教育委員会主査	1. 3. 22 ～1. 3. 31	祭と芸能	芸能部 民俗芸能研究室 中村 室長
武田 光一	新潟大学教養部助教授	1. 3. 13 ～1. 3. 27	日本南画の研究	情報資料部 鈴木 主任研究官

V. 研究施設・設備

1. 蔵　　書

美術関係図書

日本・東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全般にわたる研究書を中心に，関連図書，各種叢書，辞典類など和漢書(39,246)，洋書(4,042)，計43,288冊のほか，各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書，美術関係雑誌，紀要類，売立目録，展覧会目録などを所蔵し，所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸，その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書8,457冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌，それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書，技術史，又は数少ないそれらの科学的究明を試みたもの，修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて2,702冊を所蔵している。

本年度における収書数と総計は次表のとおりである。

区　　分	美術関係		芸能関係		保存科学・修復技術関係		計
	和漢書	洋　書	和漢書	洋　書	和漢書	洋　書	
62　年　度	372冊	7冊	347冊	10冊	22冊	15冊	773冊
63　年　度	588〃	28〃	358〃	20〃	17〃	10〃	1,021〃
総　　数	39,246〃	4,042〃	8,355〃	102〃	1,653〃	1,049〃	54,447〃

2. 資　　料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と，購入写真，複写写真による補足整備に加えて，印刷物中の図版をもおさめるという方式で，当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全域にわたり，それぞれ絵画，書蹟，彫刻，工芸，建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点，原板保有量はほぼ3分の1にあたり，別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか，拓本，作家伝記資料，落款印章資料，近代・現代作家・団体・作品資料，資料スクラップ等と，図書カード，図版カード，各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード・録音テープ・写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには，毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか，昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは，明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので，近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は，雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので，奏演法の解析を中心とした写真・テープ，あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区　分	レコード	録音テープ		シネフィルム		ビデオテープ
		従来方式	PCM方式	3㎜	16㎜	
昭和62年度	15枚	108本	30本	0本	0本	9本
昭和63年度	34〃	39〃	35〃	0〃	0〃	8〃
計	7,110〃	2,814〃	178〃	198〃	4〃	202〃

黒田記念室，閲覧室

3. 黒田記念室

黒田記念室は，本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり，黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時，主として黒田家から寄贈されたものは，油絵125点，素描170点，写生帖等であるが，その後黒田照子夫人，樺山愛輔，田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは，「知・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

4. 閲 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は，主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。年間の閲覧者数は，約390名である。

Ⅵ. 関係法規

◎文部省組織令抄（昭和59年　政令第227号
最終改正　昭63政101号，197号）

第２章　文化庁

第３節　施設等機関

（施設等機関）

第108条　文化庁長官の所轄の下に，文化庁に国立国語研究所を置く。

2.　前項に定めるもののほか，文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2.　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

3.　国立文化財研究所及びその支所の名称，位置及び内部組織は，文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第115条　国立国語研究所及び国立文化財研究所は，法第５条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則抄（昭和28年　文部省令第２号
最終改正　昭63文令12号，文令26号，文令28号）

第５章　文化庁の施設等機関

第４節　国立文化財研究所

第１款　名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9　国立文化財研究所の名称及び位置は，次の表に掲げるとおりとする。

名　　称	位　置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2　東京国立文化財研究所

（所　長）

第117条　東京国立文化財研究所に，所長を置く。

2.　所長は，所務を掌理する。

（内部組織）

第118条　東京国立文化財研究所に，庶務課及び次の五部を置く。

(1)　美　術　部

(2)　芸　能　部

(3)　保存科学部

(4)　修復技術部

(5)　情報資料部

（庶務課の事務）

第119条　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

(1)　職員の人事に関する事務を処理すること。

(2)　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

(3)　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

(4)　経費及び収入の予算，決算その他会計に関する事務を処理すること。

(5)　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

(6)　庁内の取締りに関すること。

(7)　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

（美術部の二室及び事務）

第120条　美術部に，第一研究室及び第二研究室を置く。

2.　第一研究室においては，わが国の上代，中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

3. 第二研究室においては，わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

（芸能部の三室及び事務）

第121条 芸能部に，演劇研究室，音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては，演劇及びその保存に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

3. 音楽舞踊研究室においては，音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

4. 民俗芸能研究室においては，民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

（保存科学の三室及び事務）

第122条 保存科学部に，化学研究室，物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては，文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

3. 物理研究室においては文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

4. 生物研究室においては文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

（修復技術部の三室及び事務）

第122条の2 修復技術部に，第一修復技術研究室，第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては，木，漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

3. 第二修復技術研究室においては，紙，布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

4. 第三修復技術研究室においては，石，土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

関係法規

（情報資料部の二室及び事務）

第122条の3　情報資料部に，文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2.　文献資料研究室においては，第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料（写真資料を除く）の作成，収集，整理，保管，公表，閲覧及び調査研究を行なう。

3.　写真資料研究室においては，第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成，収集，整理，保管，公表，閲覧及び調査研究を行なう。

東京国立文化財研究所要覧（昭和62. 63年度）

平成元年12月１日　発行

発行所　　東京国立文化財研究所

〒110　東京都台東区上野公園 13-27
電話（823）2241（代）